

「牽引」木村荘太

(『生活』1913年8月 都立近代美術館所蔵)

【解説】

平野謙は、昭和二十三年(一九四八)の『日本文学大辞典』の「私小説」の項で、従来の、田山花袋の「蒲団」(明治四〇年＝一九〇七)を私小説の始まりとする定説に対して、大正二年(一九一三)に、近松秋江が「疑惑」(「黒髪」連作の最初)と木村荘太の「牽引」が出た当時を、私小説が一般化した時期とした。

しかし木村の「牽引」は、どの単行本にも収録されなかった。それをここに公開するものである。

【作者】

木村荘太(一八八九 - 一九五〇)は、東京で手広く牛肉店「いろは」を経営した木村荘平の子である。荘平ははじめ正妻を持ったがこれが死んでからは八人から九人の妾を持ち、それぞれに支店を任せたと伝説的人物で、荘太はその妾の子、四男くらいに当たる。正妻の娘が小説家の木村曙、荘太と同腹の弟に画家の木村荘八、また異母弟に直木賞作家の木村荘十、映画監督の木村荘十二がいる。

荘太は京華中学卒で、上の学校へ行かなかったが、文学を志し、明治四十三年(一九一〇)谷崎潤一郎、和辻哲郎らの第二次『新思潮』に、幼馴染の後藤末雄が加わっていたことから、実家の潤沢な資産を当てにされて加わり、小説を発表した。この頃、吉原の花魁で高村光太郎の愛人だった者を高村から奪い、それで高村は詩「モナ・リザは歩み去れり」を書いている。

谷崎とは当初放蕩仲間だったが遠ざかり、岸田劉生らのフェウザン会に加わり、その後身雑誌『生活』に「牽引」を発表。その後ストリンドベルイの『痴人の懺悔』の翻訳などをするが、次第に文筆から離れ、武者小路実篤の「新しき村」に参加し、千葉県で農業に従事。この間、異母妹清子への恋に苦しむなど苦悩の生涯を送り、昭和二十五年、自伝『魔の宴』を執筆し、それらを赤裸々に語るが、刊行直前に自殺した。

【作品】

最初の妻と離婚した木村荘太が、女性解放雑誌『青鞥』で、参加したばかりの若い伊藤野枝の文章に感心して手紙を送り、会って恋におちるが、既にダダリスト辻潤と同棲しているため失恋した、その経緯を描いた私小説。野枝は同じ事件を「動揺」として書いておりこちらは『伊藤野枝全集』に入っている。なお野枝は辻との間に美術家辻まことなど二児をあげたあと、大杉栄のもとへ走り、大杉の愛人だった神近市子が葉山の日蔭茶屋で大杉を刺す事件が起きるが、大正十二年(一九二三)、関東大震災のあとの混乱の中で憲兵大尉甘粕正彦に連行され、大杉、大杉の甥の橋宗一とともに殺される。なお辻潤は野枝と別れたのち精神に異常を来し、戦時下の昭和十九年十一月、アパートで餓死しているのを発見されており、野枝にかかわった男はみな尋常でない最期を遂げたことになる。

牽引 - 木村莊太

我は光をつくり又くらきを創造す、われは平和をつくりまた禍害（わざわひ）をさうざうす、われはエホバなりわれすべてこれらの事をなすなり

以賽亜書 第四十五章

「拝啓 未知の私から手紙を差し上げる失礼を御許し下さい。さて先月の中程に事務所へ上つてあなたを御訪ねしましたのは私でした。實はその頃からして私はあなたを知りたく思つてゐましてそれで突然御伺ひして見たのでした。その日御留守で御会ひする事が出来ずに歸つてからは私は今日まであなたを知るのはこの先自然な機会に任せようと思つてゐました。と僕にはこの数日間不思議な氣持が纏つてゐる事を知るようになりました。一面に僕は今強烈な制作の熱に没頭しかけて今年一杯ほどのうちには眞の自分の処女作といへる長篇のものを書きたいとしてゐるのです。それには今の淋しいしかし静かな自己の孤独の境界を寧ろ自ら喜ばうとしてゐるのです。ところがさういふ僕にはまた一面にかなり烈しくあなたに対して興味を抱かせようとしてゐるものがあるのです。それを私は今日まで自然に自分の頭に生かして置いて見たのでした。私はあなたの書かれるものの幼稚さがかなり純らしいところから出てゐるやうなのを愛してゐます。私はあなたをいろいろ想像して見てゐます。それから私はいろんな人に尋ねて見ましたけれどただ漸くあなたに年若い方だといふより外にはなんにも知る事が出来ないでした。僕はこの節よく電車なぞに乗つて若い女の人を目にする時にそれがあなたではないかしらんとふと思ふ事があります。さうしてそれがあなたであるのに僕があなたを知らないためにそれと知らずにゐるのではないかと思ふ事があります。ともかくあなたはからして僕の頭の中に今生きてゐられるのです。僕はかういふ自分の氣持が幾分ラブに似てゐる事を驚くのです。それも単なる自分のイリュウジョンに対するラブに似てゐる事を驚くのです。僕は自分のこのイリュウジョンをば打破したく思つてゐます。あなたをあなた自体のほんとうの価値に置いた上考へたく思つてゐます。私はこれからあなたの書かれるものを氣長に見てゐてあなたを知る事に勉めようかと思ひましたが、私のあなたを知りたいといふ念は今やはりそれより少し性急なのです。それで手紙を差し上げる事にしました。若し御会ひ下さるようでしたら御都合の時処を御知らせ願へれば幸甚です。

「或ひは御会ひして見た上ではあなたの個性と僕の個性は、相反撥し合ふ性質のものであるかも知れないと思ひます。またはあなたが一層ほんとに僕の心に生き始めるようになるかも知れないと思ひます。或ひはまたただ一個の友達として静かに氣持よく御話する事が出来るかも知れないと思ひます。ともかくあなたは僕にあなたをすつかり御示し下さらうとなさいませうか。

「それから僕にはまた一方には虚心にあなたが生きてゆかれようとする上の要求を直接に知らうとするのみの願ひもある事を附記して置きます。

「尚この手紙はあなたにプライベートのものである事を御承知のほど願ひ上げます。以上」

六月九日の午ごろ、僕は「青鞥」の伊藤野枝氏に宛ててかういふ手紙を書いた。直ぐそれを麴町平河町の僕の下宿から半町と離れてゐない、紀尾井町三番地の下宿にゐる弟（木村莊八）のところへ持つて出懸けて行つて、出して見せた。僕は一月ばかり前から弟にこ

の事を話してゐた。手紙の中に書いてある先月中程の金曜に、巢鴨の青鞥事務所へ訪ねて行つて見て、留守で会へずに歸つて来た事も、弟は知つてゐるのだ。「フユウザン」六月号の僕の感想を読んだ人には疾によく領解して貰へたと思ふが、極く最近に僕は自分の女性観、恋愛観が急速に一変した。さうして僕は自由恋愛の使徒になつた。あの感想を書いた当時に、眞に自身の要求がそこまで動けば、僕は遠からずそのプロパガンドをする氣でゐた。また自分には強くその要求が動いて来さうな氣がしてゐた。

僕は殆んどこのごろ囂（やかま）しくなりかけて来た婦人問題に就いて説かれる日本の人の論議を読んだ事がない。それから「青鞥」あたりの人達の事も全く無視してゐた。僕はその時前者の方はどうでもいいが後者は無視してゐられなく思はれて来た。眞に僕等の近くの女でほんとうに生きようとしてゐる人達があるのだらうか。その要求を眞に感じて進んでゆかうとしてゐる人達があるのだらうか。僕は痛切にこの事が知りたくなつた。

僕が先月雨の土砂降りの日に、突然野枝氏を巢鴨の事務所に訪ねて見たのは、ただ主にかういふ動機からだけであつた。それは丁度僕があの感想を書かうと思ひ立つてゐた時だ。元より既にその頃からして僕は漠とした氣持で恋愛を求めてゐた。眞に自身を生かすべき恋愛を求めてゐた。けれどもそれを特に野枝氏に待たうとしてゐるといふ予期は少しもなかつた。僕はただ二三号極く最近の「青鞥」を読んで見て、野枝氏が下らない歌や小説を書かずにゐるのが目についたのだ。書くものの上に微力にしか現はれてゐないが、しかしあるいい要求を懐いてゐる人らしく感じたのだ。それで一番年若い人だといつか何処かでふと耳にしてゐた事が頭に泛（うか）んで来たのだ。全く内容を知らないけれど、この春の演説会にこの人がひとり聴衆の前に出て語つた事があつたと聞いてゐた記憶（ママ）が、ひきつづき泛んで来たのだ。僕はこれだけの理由で少くともこの人を真面目に進まうとしてゐる人と解釈した。またそれに純なところのある人らしいと推定した。僕が始めに訪ねて会つて見ようとしたのは、理由は単にこれだけで、若しこの人に対する牽引が起るとしても、それは第二の後の問題なのであつた。会つた結果で自然に起るべきそれらの第二の問題の一切を、僕は別段避けようともせねば、期さうともしてゐなかつた。

それで会はずに歸つてからは、六月の雑誌に僕の感想が出てから野枝氏がそれを読んでから、前に自分が訪ねた事をいつて、さうして手紙を出して見ようと思つた。で僕はそれから半月忙しい思ひで立て込んだ仕事の中に没頭した。月の終りにそれが大方片づくると僕は漸くホツとした。

野枝氏の事が頭に泛んだ。がその時半月以前とは僕はだいぶん変つてゐた。僕は一層内へ進んだ。一層深い根本のものに次第に余祐（ママ）なく触れて来かけた。僕は凡ての一切を悉く直接に僕のライフに触れてゆかしたいと思つて来てゐた。また随つて現在の自身のライフの充實に資さないものは凡て自身の思議から、行為から排除し尽さうと思つて来てゐた。現下の自分自身の生活に深い交渉を齎さない事はなんにもすまい。そして自身の生活に交渉する一切はなんでも、どんな事でも飽くまで恐れずに徹底して遣つてゆかう。すれば一足一足に自身の生活の深さが増せば、随つてますます深くの底にあるものが生かされて来る。自身の生活の大きさが増せば、また随つてますます自身の面する問題が大きくなる。といふのがそれからの僕の第一のモットオになつて来てゐたのである。

この意味からして広く社会を相手にプロパガンドするといふ態度が僕には遠くなつた。書いて多くの知らない女性を覚醒させようといふより、直ちに近くの僕を牽引するに足るひとりの婦人に触れて、自身の生活の力 - 恋愛の力にその人を導かうとする要求のみ、全

然僕の心を占め終るようになってきた。さうして僕はその僕の恋愛に、刻下の自身を先づ第一によく生かしたく思つて来てゐた。

随つていつか自然と僕の心の中で、野枝氏の姿はさういふ僕の要求の対照（ママ）に変形した。前出の手紙を僕が書いた動機は、外でもない、僕がこの自身の要求を自覚したからなのである。

でまた僕の今の全然肯定に傾く思索は、僕に一度失つた女性に対する信頼を回復せしめた。今の日本のエンヴァイロメント（環境）に全然にじられ尽して、その育つ芽を枯らし切られぬ力が、吾々の異性にもまたあると信ずる大きな信頼を僕は心に懐き始めた。

で僕は感じた... もう僕はぶつからずにみられない。自分の生活の全部を挙げてぶつからずにみられない。製作と恋愛とまた自身を生かす凡てに僕の全力を傾倒してぶつからずにみられない.....

弟は黙つて僕の手紙を読んで、黙つてそれを僕に返した。

「若い綺麗な人ださうだ。」

と暫らくして僕にいつた。

「とにかく会ふといつてよこせば面白いだらうと思ふ。」

僕はさういふ自分の気持がやや静平（ママ）でないのを覚えた。その時僕の心にも言葉にも、既に対手のよく知つてゐるラヴァアの上を語る時 - 特に兄弟にそれを語る時 - 思はずも伴ふやうな微動があつた。

ふたりはそれなり直ぐに話題をいつもの普通の事に移した。さうして暫らく話した後で、僕は別れて、途で手紙を投函すると、やがて一種の期待を湛へた安らかな心になつた。で尚少しそこらを散歩してから歸つた。

その前後からして僕はまた少し忙がしい思ひをしなければならない事になつて来てゐた。僕は翻訳するために本を広げて、机に対（むか）つてみながら、二三日はただ空想と期待のうちに主な時間を送つてゐた。僕はやたらに散歩し出した。何かしかけてゐるうち、自然と心その方へ取られて行つて空想に耽る度合がはげしくなると、そのたびに僕は（一日に四五遍も家を出て）そこら中を歩き廻つた。

するとある晩 - 十二三日の事であつた - 僕の古くからつき合つてゐるNといふ友達が訪ねて来た。（長尾豊）一体僕はなんでも自分の思つたり、してゐたりする事を人にはいはずに置く事が出来ないたちだ。それでこの友達にも - 今は殆んど気持の上で少しも交渉のない、単に墮勢（ママ）で時々会つてゐるに過ぎないこの友達のNにも - 半月ほど前会つた時、自分が野枝氏に興味を持つてゐるといふ事を話した。でこの友達は会ふといきなり野枝氏の事をいひ出した。Nは数日前に何かの用事で生田長江氏（この篇の後にも同氏の名前が、なんでもない僕の気持の引き合ひになつて出るのを僕は未見の同氏に対して相済まなく思つてゐる）を訪ねた時に、野枝氏の事を序でに聞いて見たのださうだ。すると生田氏が野枝氏にはある人があつて、（それが夫であるかラヴァアであるかといふ事はNも確かに聞いたのでなかつたらしい）でその人が野枝氏の署名してゐる翻訳の筆を執つてゐるのだといはれたといふのである。

間もなくNは歸つて行つた。その後で僕は今耳にした野枝氏の人に対して軽いエンヴィイ（嫉妬）を懐くと共に何ともいひ知れぬ当惑の情を感じた。僕は直ぐ追つかけて野枝氏に手紙を出さうと思つた。さうして今日僕がこの事を聞いた事實を書かうと思つた。

けれども直ぐに僕にはさういふ手紙を書くのも面倒臭くなつて、ちつとも気が向かないほど野枝氏に無關心な気持になつた。僕の感じてゐる当惑がただ、これまでの自分自身の気持に対してひとりとはなればならない一種の当惑として後に残つた。

翌る日Nから葉書が来た。その葉書にはまた野枝氏の事が書いてあつた。それには丁度その日の中央新聞に、野枝氏の事が出てゐて、その記事に依ると同氏には後藤某といふ内縁の夫があつて、近く出産したのださうだ、といふ事が簡単に書いてあつた。僕は自分の事を一種の興味で見えてゐるやうなNの葉書の書き方に軽い不快を感じて、それを読み終つた時、ますます自分の気持が野枝氏を離れ去るのを感じた。もうこの事に就いて自分から何をしようといふ気も全然なくなつた。始め図書館へ行つて新聞を見ようと思ひながら、それさへ果す気にならなかつた。或ひは返事が来るかも知れない。また来ないかも知れない。若し来ればその返事には、とにかく会ふといつてよこすかも知れない。またその事實をハツキリ知らせて来るかも知れない。どうだつてもいい。僕はジイッとただこのままにしてゐればいい。何かが向ふから開けて来る時、それに應じて始めて自分にその時出るものを出す事にすればいい。とかく思ひながら、それから十五日まで、僕は専心に急いで、好きなある短篇の小説を翻訳した。

で十四日の晩ぶつとほしに徹夜して、つづいて寝ずに翌る日の夕方近くまで働いてやつと翻訳し終ると、僕はその原稿を持つて赤坂の佐藤（惣之助）君の家へ行つた。今度の雑誌の同人がもうそこにあらかた集つてゐた。七月号の雑誌の編輯が終ると、僕等は騒ぎ出した。一同のうちの一人が真面目に真剣になり始めると急にみんなが恐ろしいほど真剣になり出して来る。それからひとりがはしやぎ始めると、期せずしていつか一同が一緒になつてまた騒ぎ出す。僕等はこのごろ寄れば互ひにめいめい触れ合ひ、力を感じ合つてゐて、ただ気持よくなつてゆくのだ。その日は晩の十時過ぎに高村（光太郎）君がやつて来てから、みんな気持が高潮に昇り詰めた。僕は前日の労れも忘れて、夜中に二三人歸つてから後、暁方近くまで話つづけた。

そして勞れて、翌る日の昼まで寝込んで、夕方宿へと歸ると野枝氏の手紙が来てゐた。手に取る刹那僕は自分が全く自分の知らない感情を蔵してゐたのに気がついて、吃驚した。僕はその手紙の内容に依つては、自分がどうかいふ打撃を受けるかも知れないと思はれた。僕は運命と面接するやうな気持がした。僕の心がただその不安のほか何物も感じなかつた。そして僕には自分のさういふ不安を感じる気持が、今この手紙を受け取つた刹那に、始めて新たに自分の心に生じたのだとはどうしても感じられない。やはり自分は待つてゐたのだ。この手紙が来る事を待つてゐたのだ。とどうしても感じられる。

僕は二三分間手に持つたまま、それを開けて見る事が出来なかつた。「市外上駒込染井三二九 辻方 伊藤野枝」としてある封筒を見詰めてゐた。字が上手だ。僕はその字に少し圧倒されるのを覚えた。

するとますます強くなる不安が、僕に急いで破つて、それを読み下させた。

「拝復 御手紙はたしかに拝見いたしました。暫く社の方へまゐりませんでしたために御返事が後れまして申訳けが御座いません。どうぞあしからず思召し下さい。

「それから先日は社の方へわざわざ～御出下さいましたのに誠に失礼いたしました。實は私は御手紙を拝見しまして初めてそれと知りませんでしたので御座います。御出下さつて後社の方へは二三次まゐりましたけれど社にゐる人が忘れて居て私にさう云つてくれませんでした

ので、ちつとも存じませんでした。

「御手紙を拝見して、私はただはづかしう思ひました。私の幼稚な、つまらない感想でも読んで下さる方があるかと思ひますと、ふしぎな様な気が致します。まだ、私など他人に手を引いて頂かなければ歩けない位の子供なので御座いまして、これからすべての事に就いて研究して行かなければなりませんので、本当は雑誌に麗々とあんな感想など書ける柄ではないので御座います。

「私はなるべく勉強したいと思つてゐましてもなまけてばかしゐますので、この上他人との交渉に忙しくなつたりしてはとてどもどうにも出来ませんから、なるべく止むを得ない少数の人との他はすべて交りを絶つてゐるのです。

「いろ～の事で私は周囲の人と今は全く絶縁の形です。青鞥社の内部の四五人の他は誰とも今の処係はり度くないので御座います。

「それで、私はあなたの御手紙を拝見している～考へて見ました。

「あなたは私を知りたいと云つてゐらつしやいます。そして、私について、いろ～な期待やなんかで待つてゐらつしやる、とさう思ひますと期待される程の何物をも持たない私は矢張り自然にお会ひする機会を待つてお目にかかるのならまだしもですが、強ひて機会をはやめう(ママ)といふ事が何とはなしに避けたいやうにも思ひました。

「然し、またまじめなあのお手紙を繰り返して考へて見ますと、どうも矢張りおことわりすると云ふ事が如何にも傲慢な礼を失した事の様にも思へてまゐります。それで兎に角仰せのやうに御目に懸つた結果はどうなりますか分りませんが御望みにおまかせする事に決心致しました。時間の御都合や何かもあなたの方でよろしい時に - 私の方この次の金曜をのぞく他さしつかへは御座いません。もしあなたの方の御都合では金曜日に社にお出下すつてもさしつかへは御座いません。二十五六日は大抵校正に築地の文祥堂へまゐります。校正も二時間間をおいて出たり、少しづつ出たりするのですから割合にひまで御座いますから印刷所の方が御都合がよかつたら印刷所でもかまひません。その他は大抵ひまで御座います。然し今月は原稿の集まり方がおそう御座いますから催促にまはつたりしなければならぬかも知れませんが、大抵は都合が出来ますからあなたの御都合次第で御伺ひします。

「フューザンにお書きになりましたのを是非拝見し度いと思つてゐますが、社に来てゐませんので一寸ついでがなくはまだ拝見しません。近いうちに拝見しやうと存じます。」

六月十四日

伊藤野枝

僕はこの手紙を何度読み返したらう。さうしてこの手紙を書いた人を幾たび想像したらう。この人がこの手紙を書いた気持をいくたびいろいろに推し量つたらう。繰り返しいくたびか読むうち、僕はだんだんこの手紙が好きになつた。僕にはその書き方からして、かなり筆者をよく想像し得るよゝうに思へた。Nから耳にした事がいつか頭から消えてしまつた。この手紙の書き方の自由さが、今度は僕にさういふ事實のあるといふのを疑はした。ただ何となくそれを否定するやうな気分にならした。といふより僕に全然その事を考へさせなくなつてしまつた。僕には野枝氏がかういふ字体で、かういふ返事をよこす人だつたのがただ嬉しかつた。そのほかに何もなかつた。

僕は仕事をしてしまつてから、ゆつくり落ちついて会ひたく思つて、次の日とにかく返事を出した。

「拝啓 御返事ありがたく拝見しました。それでは二十六日の午後に文祥堂へ御伺ひする事に致します。電話を一寸伺ふ前におかけしてから上るつもりでをります。萬づその節申し上げます。

「私には今凡て自身の上につて来る事毎がみな必然のやうに思はれてゐてなりません。からしてあなたに御会ひする事もまたやはり一種の自然な機会のやうに思はれて参りました。私をして過日の手紙をあなたに差し上げさせたものはどういふ力でせう。あなたがその私に御会ひ下さらうとなさるのもまた何に依るのでせう。私は敬虔に慇懃に運命と握手しながらあなたと御会ひする日を待ちます。

「私はほんとうにあなたの御手紙を読む事を喜びました。あの御手紙で私にあなたがこれまでよりもずつとハッキリ解つたやうに思はれたからなのでした。ではその節を御待ちします。

「『フコウザン』が手許にありましたから同便にて御送りします。来月は『生活』と改題して同人が変更します。私はそれにガルシンを訳しました。」

六月十七日夜

とかう書いて送つた。

それから暫らく僕はただ、毎日毎日仕事で暮した。でその間どう誰れかに会ふとは予感予感とよく僕はいつた。そのうち新しい恋愛が自分に起る。大変にいい恋愛が自分に起る。さういふ予感が頻りにするとよく僕は人にいつた。

二十日前後からして僕はいろいろの事で遅れた仕事を急ぎに、夜昼を逆にして昼間眠つて毎晩徹夜しつづけてゐて、二十三日の午ごろ起きると野枝氏から葉書が来た。でそれには今月校正が早く終つて、二十五日に済むかも知れない。二十六日までかからないかも知れないと書いてあつた。

僕はこの上会ふのを予定の日より一日も延ばすのに堪えられなかつた。もう直ぐ - 出来るだけ早く会はずにゐては、なんにも手にはつくまいと思はれた。僕は直ぐ弟の下宿へ行つて、文祥堂へ電話をかけた。呼び出すと野枝氏が出た。

「今御葉書を拝見しました。若し御差し支へなければ今日これから御伺ひしたいと思ひますが如何でせう。

といふと、落ち着いた、何処か訛りのある声が出て、

「ええ、どうぞいらしつて下さいまし。ひまでございますから」

と直ぐに答へた。

勿論僕は直ぐ出懸けた。途々、電車の中でも通りでも、「ひまでございますから」といふ落ちついた、何処か快い訛りのある声が耳の底にひびきつづけた。僕には会つて何をいほうかといふ考へがちつともなかつた。ただその声の主を知りたいとあせるばかりだつた。

とうとう文祥堂の前へ行つた。僕は入り口に近づいた時、二階の窓のところに依りかかつてゐる後ろ向きの人髪の毛をチラリと見た。胸が躍つた。這入つて、聞いて、暫らく店先に佇んでゐて待つと、その人が階段を降りて来た。

簡単に挨拶をして、僕はその人の後から階段をつづいて登つて、校正室へ這入ると、そこにはもう一人婦人がゐた。僕にはそれが小林歌津（小林清親の娘）だと直ぐに解つた。

歌津氏は窓際の椅子に靠れて何か小説を読み始めた。僕は中央にある大きな卓を隔てて、野枝氏とはすゝ〜` に対し合つた。僕は野枝氏がまだ極く子供らしい感じの人であることを少し意外に思つた。暫らくするうちその意外なのが却つてシククリその人に合つてゐるらしく思はれて来た。

その時目の前にゐたのは全然僕の想像と違つた人だ。あまりにその人の若かつた。あまりに木地のまま過ぎた。確かな口調で淀まずぐんぐん自分の事を話す態度 さうしてしかも目が会ふ時々眞赤になつて下を見てうつむく様子 でまたある時紅潮しながらキツと目を僕にそそいでゐて語り継ぐさま かういふ態度の矛盾がすべて自然に一つにこの人に結合した印象となつてゐる不思議なチャームが、直ぐ僕の心を牽いた。

僕は簡単に自分が会ふまでの気持を語つた。そして、

「僕にはあなたがひとりの方ではないか（ママ）といふ不安があつたのでした。中央新聞に出たとかいふ記事の事を聞いてからです。そしてさうだとすれば大変失礼な事をしたと思つたのです。けれども僕が手紙を書いた時には、ちつともさういふ事は知らなかつたのですから。」

といふと、野枝氏は肯いて、

「ええ、あれは - このごろよく新聞の人や何かが会ひたいと言つて来て、前にはそのたび会つてよくお話したのですけど、それがいつでも誤つて書かれたりしますで（ママ）今ではそれをなるだけお断りする事にしてゐるのです。それで中央新聞の人にも平塚さんだけ会つて（？） 私は会いませんでした。さうするとあんな事を書かれてしまひまして。」

と僕には事実を打ち消すと取られるやうな口調で答へた。

続いて野枝氏は自分等の仕事の事ばかり多く語つた。このごろ真面目に遣つてゐる自分等の仕事が世間から誤解され、中傷されてゐる事、それには当分自分等がひッ込んで勉強してゆくより外はない事、今自分等は実に真面目に本当に進まうとしてゐるものである事、さういふ自分等の「青鞥社」の仕事の事ばかり多く語つた。僕にはこの人が一番純一らしく思へて来た。でこの人のいふ事をすべてこの人自身を語るのだとして気持よく聞く事が出来た。僕は今外の「青鞥」の人達の事はどうでもいいのである。野枝氏を知ればいいのである。

で僕等はもっと直接に自分自身を語り合いたいといふ気がした。僕は女のエマンシペエション（解放）新しい男女関係、それらのすべてが男の要求にもまたならなければならぬ）といつた。それから二三日前読んで（ママ）スエデンボング（ママ）の天界の結婚の事などを話した。野枝氏はジツと聞き入つた。さうしてやがて卓に両手をかけて、その肩を低く屈めて、頬を染めながら熱心な目付をしてゐて僕を見上げていつた。

「私は近くにいろんな事に遭ひまして、やつとこのごろ一先づ片がついたのですけど、もう直きなんだかまた大変に自分が激動するやうな事になりさうな気がしてゐます。」

「僕も今自分にはさういふ事がありさうな気がしてゐます。けれども僕は實に自分を信じてゐます。これから自分に來る事がみんな自分にいい事ばかりだといふ気がしてゐます。」

と僕は答へた。

僕はかうして前から話してゐる間ぢう、始めのうちには屢々友達の N が生田氏に聞いたといふ翻訳の事も確かめて見たく思つた。けれども部屋の隅にゐる歌津氏を妙に感じて、僕はとうとう直接にその事が聞き得なかつた。とこの時それが全然僕の心から消えてしまつた。今僕に対して女がかういふ拳措に出る自由さと大胆さ - 僕にはそれで一切の掛念が

この時に消えてしまつた。さうして僕の聞いてみた事のすべてが、「一先づ片のついた」といふその過去の事であるらしく思はれて来た。

間もなく校正が終つて歌津氏が僕等のところへ来た。さうして僕等は普通の初対面の男と女が話す通りの話を少しし合つて、やがて三人して一緒に文祥堂を出た。

僕はまだ野枝氏と話してゐたく思つた。といふよりもただ別れなくなかつた。それで三人とも銀座へ出ればいいといふので、尚少しそこらを一緒に（ママ）散歩してゆく事になつた。僕等は三人かはるがはるに話の続きを追ひながら明石町の海岸へ出た。と僕には一年前の最近の過去の記憶が泛んで、次第に今の気持に混り合つて来た。僕は築地に殆ど去年一杯住んだ。その僕は実に真暗な僕であつた。生きようとする自分の力が殆んど全く消え尽きたかと思はれる暗さのうちに、ただその暗い自分の心を見詰めて、僕はよくこの辺の町を歩いた。その時僕の心に写つたものはただ死と、人生の惨苦の姿と、一切のものの否定のみであつた。僕は並んで歩を移してゆく野枝氏の横顔を見ながら、あだかも心に沁み透るやうな回想のうちに浸った。その回想と静かに恋ひを醸してゆく現在の心地と混り合つて来て、僕は名状し得ない気持を懐きながら歩いた。

さうしてゆくうち僕には野枝氏が福岡の生れで、長崎に育つた事のある人だといふ事が解つた。さうして僕にはこの人が純な素直なものをいろいろの周囲に煩はされずに、多分にまだ持つてゐる人だと信じようとする念が強くなつた。

随分歩いて、そろそろ店に燈りが点き始める頃、僕等はやつと銀座へ出た。

僕は別れる際に野枝氏が一瞬間僕を見上げて、さうして僕はその好意のハッキリと読み得た短かい凝視を深く心の底に仕舞つて、直きその近くの母の住む家へ立ち寄ると直ぐ紙を展べた。

それから僕は続けて二三日、遅れた仕事を急ぐ合間に毎日野枝氏へ宛てて手紙を書きつづけた。

「伊藤野枝様。

「只今は失礼しました。僕はあなたに御別れした今直ぐにこの手紙を書きます。僕は今日随分いろんな事を言ひ洩らしたのを感じます。それを今書かうとします。

「一言にして言へば僕には今日の会合が非常に物足らなく感じられるのです。あなたに対する私の予期は当りました。私はあなたが今日御会ひしたあなたである事を喜びます。私はもつともつといろいろの事をあなたに御話したく思ひます。今日まで私はただただあなたを知りたいといふ念にのみ燃えて来ました。それが今 - その僕の要求が急速に変化しました。僕は今出来るだけよく、出来るだけ沢山、僕をあなたに御知らせしたく思つて来ました。何から書いていいか解りません。書きたい念は心の中に溢れてゐます。

「僕は今日あなたに会つてからの自分が、若しもあなたがいい方だつたら、恐らく非常な激動のうちに投げ込まれる事であらうと予期してゐました。さうしてその凡ての惑乱に備へようとしてゐました。僕は今その自分の気持が割合に静平である事を少しく意外に思つてゐます。

「私は今日まであなたがひよつとかすると御一人の方ではないかも知れないといふ掛念に非常に悩まされてゐたのでした。（耳にした新聞記事やその事で）。さうして若しもその上あなたがいい方だつたら實に自分は堪らぬだらうと思つてゐました。併しそれでも自分はよいと思つてゐたのでした。僕はあなたの事をひとり心に生かすのみで充分自分が幸福に

なり得ると思つてゐたのでした。

「さういふ掛念は去りました。私は自分の心の中に播かれたあなたに対するこの愛の種子がこれから毎日に成長する事を感じます。どんどんそれが強くなるのを今から感じ得るやうに思ひます。今も私はあなたに御会ひした事を幸福と思つてゐます。幸福に面してそれに背かうとする人間があるでせうか。その幸福にますます近づかうとしない人間があるでせうか。

「私は天性極端にパッションエトな性情を受けてこの世へ生れて来ました。その私が今自分でも不思議な位静平な心境を保つてゐられるのは一つはあなたの人柄に依るのだといふ事を感じます。あなたは少しも愛するものの心を掻き乱さうとなさる所を持つておいでになりません。(あなたはあなたに対する卒直な感じを御聞きになる事を御喜びなさるだらうと思ひますから失礼ですがここに書きます)あなたは少しもセンシュアリイに男に触れようとなさいません。私はその事を一番強く感じます。それは全然対当のあなたに依るのか、一面今の自分の心情も手伝つてそれをあなたから感受せぬのか、これはまだよく自分にも解りません。

「私のためにはさういふあなたに御会ひし得たといふ事がどれほどの喜びでせう。

「あなたは今日僕をどう御考へなさいました? 私は若しもあなたに私を尚知らうとなさる御心がありましたらこの後もまた御会ひする事を御許し下さるやうに御願ひしたいのです。僕は今些か自分が恋愛(と敢て書きます)するに就いては、自分をもまた愛人をも幸福にする手段を知つたと思ふものです。あなたは僕がどれほど本当に生きていと望んでゐるものであるかを御知りになると思ひます。その僕の孤独がどれほど深いものであるかを御存じになると思ひます。

「けれども僕はあなたになんにも求めようとはしてゐません。ただあなたもまたあなたの御心の中にある自然をば自然に御育てなさる事を望まうとするのみです。若しさうあなたがなされば僕に御会ひになつたこの事はまたあなたをもよく生きさせる事にならうと思ひます。

「今僕は實に力が足りません。僕は出来るだけ広く自分の愛の手を人類に対して差し伸べたいと思つてゐますが、自分自身のライフを絶えず充実させてゆきつつ、且つ届く範囲は實に狭いのです。(僕が対社会的の行動を避けてゐるのも、それが兎角に外面的の思議に流れ易い事を思ふからです。)さういふ私は一人の人を深く愛してその人の心の底の人間に出来るだけ強く触れたく思つてゐます。それが自分の愛を拡充させる現下の最良の手段だと思つてゐます。

「またひとりの婦人を通してあらゆる全般の婦人に自己を語りたく思つてゐます。

「私はあなたを愛します、愛します、愛します。その愛に自己が生きます。世界が生きます。

「實は私は既にあなたを愛してゐました。ですから私は今日若しあなたがその私の愛を激しく裏切る方であつたら、(私には随分人の外貌に対する選択なぞもあるものですから)實にこの上のない不幸だと思つてゐました。で私はその運命の前に盲目に震えてゐたのでした。私はもっと自分の運命を信じていいといふ勇氣を得ました。

「僕は今実にいいのです。

「私は今日特に第一にあなたに御尋ねしたく思つてゐて、小林さんがゐたもんですから言はずにゐました事があります。ある友達が生田長江氏の許であなたの御訳しなすつたエレ

ン、ケイは他の方（あなたに交渉のある方といふ意味で）の手になつたと聞いたと数日前私に伝へた事なのでした。私はお互ひのこれからの交渉し方に就いて、あなたと私の現在の境界をハッキリ確かめて置きたく思つてゐたのでした。今まださういふ不安が私に全然一掃されてゐないのを感じて来ました。といふのはさつき御願ひしました尚御会ひ下さる事を御願ひするに就いて、度々手紙を差し上げるかも知れない事に就いて、就中あなたに対する私の愛の処置し方に就いて境界を明らめて置きたいといふ念なのです。

「それに就いても私は不思議な運命を感じます。若しその事を今一週間ばかり以前に - あなたへ始めの手紙を差し上げる以前に聞いたら、あなたに御会ひする念は放棄してゐたに違ひないのです。實際それを聞いてからあなたの始めの御手紙を頂くまでは私は随分当惑を感じてゐて日を送つたのでした。

「私は今途中にゐます。仕事の模様で今晚ここへ泊らうと思つてゐます。麹町の宿に始めてあなたに手紙を差し上げた夜に書いたものがあります。歸つてそれを御送りしたく思つてをります。いろいろ御妨げして相済みませんが一応御目を御通し下さるように御願ひします。

「長々と纏らぬ事を書きました。御推読のほど願ひ上げます。

「若しまた御序でもありましたらば汚い処ですが御寄り下さい。御参考になる本なぞ貧しい蔵書ですがあるかも知れないと思ひます。

「ではこれで失礼します。」（六月二十三日夕）

「伊藤野枝様。

「前便の手紙を書き終えましてから少し勞れて私は今一寸銀座を散歩して来た処です。私はいろいろあなたの事を思ひ泛べつつ歩きました。でやはりこの事を申し上げようといふ決心をしてかへりました。實は私は何れあなたの手を執りたいとしてゐるのです。あなたが眞に私とおなじ真理を見てゐる方なら。あなたがさういふ真理を見てゐるために敬虔に自己を捧げようとなすつておゐでなさる方なら。その真理とはもとより自己を離れて自分以外に存するものではありません。さうして一切の感情も意志もまた必然に、自己の理性が認めて眞としてゐる処に等しく住いでゆかれるものでなければなりません。

「研究とは何でせう、勉強とは何でせう。凡て生活がある事を予想します。生活の上に立つ事を予想します。生活は凡ての研究を妨げません。ただそれを深めます助長します。

「若し研究の妨げとなる生活があれば、恋愛があれば、結婚があれば、すべて皆それらは虚偽です。眞にその人を生かすものではありません。

「あなたは自分が避けたいとしても避け得な一種の力を御存知ですか。それは自然の力です。その自然の不可抗の力に全力でぶつかる処にその人の生活が生れます。眞の生活が生れます。僕は今その力に面してゐる事を感じます。さうして自身に対する最良の解決が自身の手の中にある事を感じます。

「あなたに私が自身を知られたく願ふのはそのためです。そのためにほかなりません。

「私には近くにあなたに御目にかかりたいといふ気が頻りにします。

「私はあまり自分を露骨に直接にあなたに接触させ過ぎるかも知れません。大変失礼な事を申してゐるのかも知れません。併し私にかういふ凡てをいはせるものはあなたです。私の心の中のアナタが何でも構はず話していいといはれるやうに私には思へるのです。

「私がさつきあなたに何にも求めぬと書いたのは自分を偽つてゐたのだらうかと今反省し

ましたがそれは偽りではありませんでした。私はただあなたが私をよく知られた時の結果を知りたく思つて且つその結果にある期待を持つてゐるだけなのです。

「そのうちいつかまた御会ひする事が出来れば大変嬉しいと思ひます。」(二十三日夜)

「伊藤野枝様。

「昨日は失礼しました。實は私は三晩ばかり徹夜を続けてゐたものですから御会ひしました時は大変勞れてボンヤリしてゐました。それで昨晚御別れしてから少しデリリヤム(譫妄)の気分であなたに宛てて長い手紙を書きました。続けて二通書きました。そして帰宅する前途中から投函したのですが、今気着きますと二通とも番地を落してをりました。ですから多分御手元へ届かぬだらうと思ひます。今そのゆふべの私の気持を御伝え出来ぬ事を残念にも思ひ、また一面に御目にかげずに済んでよかつたとも思つてゐます。

「私はあなたに御目にかかつた事をよかつたと思つてゐます。あなたが昨日御会ひしたあなたであつたのを大後喜ばしく思つてゐます。私はこれからあなたと交渉し得ずに自分が一番いい生き方をし得るといふ事をどうしても想像する事が出来ません。私はこれから自分が大変な事になりさうな予感をします。でその事はどうなつても自分のためには非常にいい事であるやうな予感をします。私はぐん~`昨日ほんとうに自分の心に播かれた種子を育てます。少しも恐れずに育てます。

「あなた若し気が向いたら御序での節にでも汚い処ですが御立ち寄りなすつて下さい。至極貧しい蔵書ですが何か御参考になるようなものもあるかも知れません。昨日はほんとうに何も言ひ足らないばかりでした。私はもつともつとあなたに御話したい事が沢山あるやうに思つてゐます。

「私は今はこの上あなたを知らうとするより自分を一層完全にあなたに御知らせしたく思つてゐます。直接に言ひます。私は烈しくあなたを恋ひするようになるかも知れないと思ひます。けれども私は自分自身を恃んでゐます。これから自分のゆく処凡て自身に幸福あるのみであると確かに信じてゐます。あなたはあなたの御心をどうか恐れずに自然に御育てなすつて下さい。さうして私の注ぐととろのものを御受けになつて下さい。ほんとうにいい婦人としてそれを御受け取りなすつて下さい。どういふ風に私の愛を御受け取り扱ひ下さつても構ひません。ただよく御受けなすつて下さい。それがあなたに対する私の唯一の期待なのですから。

「私はいつか自分があなたの手を執るべき日の事を夢みます。あなたが私をすつかり御知りになつたその日の模様では。

「御話したい事は實に沢山あるのです。ですけどもこの二三日まだ私は手の放せない事があるのでゆつくり書けません。

「そのうちに何れゆつくりまた御話する事が出来れば大変嬉しいと思ひます。

「今日はこれにて失礼します。」(二十四日ひる)

「伊藤野枝様。

「今日私は少し苦しみ始めました。よくよく反省すれば僕の心の中には強くあなたが得たいといふ願ひが潜んでゐるのを知つたからなのです。私があなたに御会ひして得た印象はこれまで私の全く知らないものでした。僕はあなたに大変いいものの芽がある事を感じました。僕はあなたといふ方の愛を得るべき人を想像する時心が強く震えます。その人の幸

福を思ひます。

「けれども僕にはあなたがこれからゆかれる途の随分長い先だといふ事がまた感ぜられます。僕はこれからあなたがシッカリ周囲を見定めてゆく目を十分に養つてゆかれる事を祈ります。あなたの持つてゐられる芽を何物にも蔽はれず生かしてゆかれる事を祈ります。

「僕はこの今の自分の若しみを甘受します。苦しくつても少しも暗くはありません。僕は制作します。あなたが心に生きて来れば生きて来るほど僕は何かをしずにはみられなくなつて来ます。兎に角僕は凡てこれから自分の墜つてゆく境界に就いてあなたが御会ひ下さつた事を感謝します。

「僕は初めからしてあなたを愛しろと何かに会ぜうれてみたやうな試がしてゐます。僕は御手紙を頂いた時就にあなたがいい方である事を信じました。それから事毎にその僕の確信を裏切るものがなかつたのです。寧ろ助長させるものにのみ会つたのです。

「僕はあなたをまだよく知りません。がただ併しあなたを感じます。僕はあなたに対して自分がかういふ思ひをかけるのが随分軽卒ではないかといふ反省をよくします。併しさういふ氣持に自分になつてゆくのを自らどうもし得ないのです。僕は何も彼も言ひませう。實はかう感じるのです。若しかして先々に僕にあなたの愛が得られる日があれば、すればあなたの持つてゐられるいいもののチャームがただあなたにのみでなく僕のためにもいいものになつて成長すると信じてゐるのです。その牽引は神秘です。あなたの力のうちのみあるとも思はず、僕の力のうちのみあるとももとより思へません。ただあなたは誰れか異性な（ママ）愛する事に依つて一番よくそのあなたの芽をば自身のためにも成長させ得るのだといふ自覚をなすつてゐられますか。その時個人と個人とが生きると共に、また人類が生きるのだをいふ自覚をしてゐられますか。

「僕は若しあなたと僕と互ひに愛し得る運命に作られてゐるものだとすれば、この僕の愛がまたあなたをも生かす力を有する事を疑ひません。若しさうでなく僕のみひとりあなたを愛してゆかねばならない運命だとすれば、僕にはそれでもやはりいいのです。僕があなたに注いでゐる愛はた僕ひとりのみをよく生かします。

「昨日はからず大分前から心懸けてゐた絶版の『シスタアス、ラヂェフスキイ』が手に這入りました。若しもあなたもがまだこの本を御読みになつてゐなかつたらば、私は自分のこの喜びをあなたにもまた御分ちしたく思ひます。（『ソーニャ・コヴァレフスカヤ自伝』のこと）

「少し仕事をしようと思ひますからこれにて筆を擱きます。」（二十五日朝）

「伊藤野枝様。

「今は十二時を過ぎました。私の心は今汪然としてあなたに注がれる事を感じます。今私の前には卓に対し合つてるあなたの姿があるのです。あなたに御話してゐる氣持でこの手紙を書かうとします。私は刻下自分の心に湧き上る思ひをかうしてあなたに宛てて書くほか自分自身の運命を開拓する方法を知りません。またさうするより外に日々のある時間を消す方法を知りません。

「私は今の自分の態度があなたに何だか予定の行動に見えたら随分困る事だと思ひます。初めてあなたに手紙を差し上げた時の私が痛切に何かを求める心持でゐた事は事實です。私は対照を求めてゐました。自分の愛を濺ぎ得る異性の対照を求めてゐました。併し私は容易く誰れにでも自分を語り、自分の愛を濺ぎたくないと思つてゐました。私は自分の貴

い孤独をも出来るだけ尊重したいと思つてみました。その私です。今あなたに宛ててこの手紙を書いてゐるものはその私です。

「また私はあなたに何かを強ひるような態度になりたくないと思つてみます。何かをあなたに願ふようにもまた乞ふようにもなりたくないと思ひます。若しこの先にどうしてもさうしなければならぬようになるのに気着けば私はあなたを離れるでせう。さうしてひとりしてどんどんさういふ自分の気持を進めて行つて見るでせう。

「若しもあなたと私との関係がオオル、オワ、ナッシングのものだとすれば私は非常に淋しく思ひます 相合ふか、また離れるか。さうしてその間静かなフレンドシップの調停を容れ得ぬものだとしたら大変淋しく思ひます。今日私にはその離れる方の予感の方が多いのです。コワレフスキイの自伝の中にソニアの姉がドストエフスキイの愛を退ける処があります。私はふとその処をば今朝読みました。そのドストエフスキイの言葉にかういふ言葉があります。

“Anna Ivanovna, don't you understand that I loved you from the first moment I saw you, nay, before I saw you, when I read your letters? I love you not as a friend-no, passionately, with all my heart--,

「勿論境界は違ひます。私のためには男と女の結合が、一人が一人を動かさうとして勉めるなぞといふ事よりももつと自然なものでなければならぬと思へるのです。強いお互ひのラヴがないのに一人が一人の愛を乞ふといふ形式を堪えがたく思ひます。どんなにひとりその愛が強くあつても、純であつても。

「私はあなたに手紙でかうしているいろいろ御話するのが明日にも最後になりさうな気がすると共に、いつまでそれが続くか解らぬような気がします。ちつともこの先の自分の気持の変化を予測する事が出来ません。私はゆける処まで行つて見ます。私をゆける処までゆかして御覧になつて下さい。

「私は今かなり先日御会ひした時の話がはぐれてゐた事を感じます。私のためには小林さんの傍にゐた事が悪かつたのです。あなたは随分よく私に解りました。けれども私はあなたに何を語つたでせう。私があなたに語りたいのは、直接あなたに御伝えたいのは靈魂です。自分の靈魂の言葉です、私はいづれこの半月の自分の心の経過を静かに纏つてあなたに御伝えたいといふ気がします。が今は駄目です。私はまだ少し混雑を感じてゐます。これにて今晚は筆を擱きます。」(六月二十五日夜半)

二十六日の午ごろ僕は起きると直ぐに、この最後の手紙を投函しに出た。それから少しそこらを歩いて直ぐに帰った。

僕はその時自分が殆んど疲労し切つてゐるのを感じた。頭も疲れ腕も勞れた -。僕の右腕はもうペンを握るに堪えないほどの痛みを感じた。もう僕の頭はほとんど物を考へる氣力を失つてしまつてゐた。僕は奇体な悪寒すら身体に覺えた。

でも僕は机に原稿紙を載せた。さうして本を開いて一二枚それから訳した。

すると婢がその時手紙を持つて来て渡した。厚い封書だ。野枝氏のだ。

僕は直ぐ封を切つた。ペンで原稿紙に書いてあるのと、厚く重なる数枚の半紙に一杯墨で書いてあるのと、手紙がかう二通這入つてゐる。

「私は今疲れ勞れて歸つてまゐりました。昨朝あなたのお手紙を拝見して書きました返事

を持つて今日一日私は迷ひました。私はあなたのその次のお手紙に対しても、それから麹町のお宿からのお手紙を今朝受とりましても何にも書く事が出来ませんでした。昨日一日私は午前書いた御返事を持つたまま苦しみました。今朝はかなりの疲れてみましたが、それでも校正に行かなければなりませんでした。

私はまだ返事を持つて文祥堂に出懸けました。あすこの二階で何かもう少し書いてからと思ひまして　でも何にも書けませんでした。私の頭はあなたの事で一ぱいになつて居りました。校正もおちついては出来ませんでした。

「私はいくら落ち附かうと思つても落ちつけませんでした。そのうちに小林さんと岩野さんが来ました（岩野清子＝泡鳴の妻）。私は二人とお話するのさへ物憂く思はれました。それに校正はいつもより沢山出ました。私は疲れ切つて文祥堂を出ました。さうして今日も矢張り二人に引つぱられて一昨日歩きました処を歩いて銀座に出て、通りをまつすぐに日本橋まで歩いて、其処から電車でかへつてまゐりました。帰りますと机の上にあなたの御手紙が待つてゐました。私はもうどうしていいか分かりません。私はあなたのお言葉の一句々々も気が遠くなる程の力強さを覚えます。こんな真実なそして力強い愛を語られる私は本常に幸福だとしみ～`思ひます。けれども私は本当に、それと同時に心からおわびしなければなりません。私の一昨日の態度　あなたに対する　その本当に鮮明でなかつた事をおわび致します。私は昨朝御手紙の返事を書きますとき、ただあはてて居りました。ああ誰が　あなたの愛を却け得ませう。私は心からあなたを愛します。本当に、本当に心から　然し私は自分を偽り度くは御座いません。また同時に他人をも欺き度くはないのです。苦しい心をおさへてあれだけ書きました。そして二信を拝見しました時に私はもうどうしていいか分からなくなつてしまひました。御返事の後れたのはその為めなのです。何卒あしからず御許し下さいまし。もう、私には何も書けませぬ。この上何が書けませう。すべての判断解決はまじめなあなたにおまかせ致します。何卒、々々、御許し下さいまし。私はあなたのいまの静かな明るいお心持ちをすこしでも揺がすといふ事を大変かなしく情なく思ひます。もう書けませぬから失礼いたします　二十五日、夜、九時」

野枝

「御手紙拝見いたしました。そして私はあの御手紙の全面に溢れたあなたの力強い真実に強く接しました。同時に私は何とも形容の出来ない苦しい気持ちになりました。實は昨日お会ひしました時私はもつとお話しなければならぬいゝ～なものを持つて居りました。それはあなたがあの手紙をお書きになる前に知つておいて頂かねばならない事なのでした。昨日あすこでお別れしまして後に私はかへつたらすぐにそれ等の事を書いてあなたに御送りしやうと思つたので御座いました。然し昨夜は可なり労れてゐましたので何にも書けませんでした。そして今朝御手紙を拝見して私は本当にどうしていいか分からなくなりました。私はあなたに何とお詫びしたらよろしいので御座いませう。本当に私が気がよはかつた為めに申後れてしまひました。でも私は自分を偽はるといふ事の出来ない者で御座います。そしてまた人を欺く事も嫌ひで御座います。私はおなじみの浅いあなたに対して申あげる事ではないので御座いますが、あなたをまじめな方だと信じて御話いたし度いと存じます。そして、それはあなたに一層私といふものがはつきり御わかりになるといふ事を信じます。「委しく御話すれば随分長いのですけれどもくだらない事はぬきにして御話いたします。昨日御会ひしたあなたの眼にはどううつりましたか存じませんが、小さいうちからいゝ～

～な冷たい人の手から手にうつされて違つた土地の違つた風習と、各々の人の違つた方針で教育された私はいろ～な事から自我の強い子でした。そして無意識ながらも習俗に対する反抗の念は十二三才位からめぐんでゐたので御座います。私は生れた家にも、肉親にも、兄妹にも親しむ事の出来ない妙に偏つた感情を持つてゐるのです。十四五位から私は叔父に監督されて勉強するやうになりました。私の十七の夏、帰省しました時、意外にも私は結婚の話を持ち出されました。本当に意外なのです。勿論私は断つてしまひました。然しその時は既にもうすべての約束はすんでゐたらしいのです。すべては叔父の専断でした。

「私は少しの猶予をも与へられずに結婚を強制されたのです。のがる事の出来ないと解つたときに私は周囲のすべての人を呪ひながら或る決心と共に式につらなりました。私の夫となるべき人が如何なる性格を持つた人か、如何なる履歴を持つた人も知りませんでした。姓名さへも私は知らなかつたのです。無論その人は私がすべてを捧げ得る人ではありませんでした。如何なる方面から云つても私と反対の人らしく思はれました。私は意地をはりぬいて、ろくに口もきかずに直ぐに上京を口實にかへりました。そしてとうとう帰校いたしました。けれどもその時、私は五年でしたから卒業はすぐ目前にせまつてまゐりました。卒業した後は無論知らない嫌やな家庭に入らねばなりません。私はたゞ一日々々とその日の近くなるのを恨みながら苦しい心持ちを抱いて、学科の勉強さへも怠り勝ちでした。いよ～三月になつたとき私は国に帰るまいと決心したのですけれども、私の従姉が私と一緒に卒業して一緒に帰る事になつてゐるのです。勿論公然と止まる事は出来ませんので、どうしても一度は東京を従姉と一しょに出なければなりません。そして途中で従姉からはなれて暫くかくれやうと思つたのです。そして緊張しきつて日を送りました。

「卒業試験もうやむやで終つて二十六日が卒業式といふ事になりました。私はなるべくゆつくりして、いろ～な準備をして置かうと思つてゐますと、突然従姉の祖父がなくなつたりして二十七日に帰らねばならないやうになりました。私は、もう何する間もありませんでした。二十六日の夜は、私の体が裂けてもしまひさうな、苦しい大擾乱の中に泣く事も出来ない悲痛な気持ちでおそくまで学校に残りました。翌日は立たなければなりません。丁度その時、上野の竹の台では洋画家の日本画の展覧会と青木繁氏の遺作展覧会が開いてゐました、私はそのたつ日、二十七日にすべての事をすててそれを見に行きました。私のために一緒に行かうと云つて一緒に行つてくれたのは学校の英語の先生でした。

「私は昨日一昨日あたりからの激動にわく～してゐましたので落ち附いて見てゐられませんでした。そしてそのかへりにはじめて、何の前置もなしに激しい男の抱擁に会つて、私は自身が何かをも忘れてしまひました。惑乱に惑乱をかさねた私はおちつく事も出来ずそのまま新橋にかけつけました。新橋には多勢のお友達や下級の人たちが来てゐました、従姉はさきに行つてゐましたが私のおそかつたために汽車の時間に後れたのです。私は再び小石川までかへつてまゐりました。すべての事は私には夢中でした。何を考へる事も出来なかつたのです。再びその夜十一時にたつ事にして新橋に行きました。私共に厚意を絶えず持つて下すつた三人の先生がおそいのもかまはず送つて下さいました。汽車の中でだん～おちついて来ますという～な事、考へなければならぬ事が頭に一つ～浮んで来ました。一番に浮んだ事は昼間自分に対する男の態度です。私はそれが何だか多分の遊戯衝動を含んでゐるやうにも思はれますのですが、また何かのがれる事の出来ないものにとらへられたやうな力強さも感ぜられるのです。私はどうしていいか迷つてゐるうちに汽車

はずん～`進んで行つて、もうのがれる事が出来ないやうなはめになりました。そして仕方なしに帰りましたが、かへつてもぢつとしてゐられないのです。私はすべて私の全体が東京に残つてゐる何物かに絶えず引つぱられてゐるやうに思はれて苦しみました。そして直に父の家を逐はれて知らないいやな家に行かねばならないといふ苦痛も伴つて、とうとう私は丁度帰つて九日目の日家を出てしまつたのです。暫くの間十里ばかりはなれた友達の家にゐました私は、私の在校中に可なり私のために心をつかつて下すつた先生のお力によつて上京しました。それまで私はその先生方にすらそれ等の事情をお話しなかつたのです。そして、私はさしあたり行く処がないので、英語の先生のお宅に御厄介になつて、そしてゐる～相談しました。

「国の方のさはぎは予期以上に大きかつたのです。そしてさはぎは学校にまで及んで、そのために私を助けて下すつた二人の先生は可なりに御迷惑だつたのです。そして、私はその時はもうはつきりした意識の下に真実に男を愛してゐました。男も私を愛してくれました。私共は、かう云ふ関係になつて、それをだまつてゐるわけには行かないやうになりました。私共は出来るだけまじめに卒直に、教頭まで打明けました。私は卒業するまでしばらくの間教頭の先生の御宅にゐて、起き伏してゐましたので、かなり話が分つてる人だとも信じたので 処が私共のそのまじめな行為は認められないで却つて一層誤解されて事は更らに面倒になりました。男は断然学校を止めてしまひました。もう一人の先生もおなじ行動をとるといふ事を云つてらしたのですが、その先生はとにかくいろいろ～な事情でお止めにならなかつたのです。その先生は私の在学中の担任の先生でした。男は家に対して責任の多い身体でした。母と妹を養はねばならない人でした。勿論財産といふものもないのです。直ぐに生活にさしつかへるのです。その苦しい中にゐて私はたゞその事件の解決する日を待つてゐたのです。けれども六月になつても七月になつても駄目なのです。七月の末になつて、私は、仕方がありませんから自身かへつて解決して来やうと思つてまたかへつたのです。帰ると私はその日からいろいろ～なものでひし～と縛ばられ責められたのがれる道もないのです。私はたゞ『眞』といふ事一つを味方にしている～なところみを目を瞑つてうけました。けれども後から～といろんなものに逐はれて私は極度に勞れて体さへ健康を害してしまつたので御座います。而も周囲の者はなを惨酷に、肉身の恩愛や義理、人情などいふものでびし～と責めるのです。私は幾度か絶望に絶望を重ねて死を決心しました。けれどもその度びにたつた一つの私の愛はなをその度びに深く～心の奥に喰ひ入つて力強い執着となつて、私のすべてを支配するやうな事になつて来て苦しみ悶えながら死ねないのです。私は、とうていただでは打ちかてないと思ひましたので、とう～周囲を欺いて安心させて油だんを見て再び上京しました。去年の十一月なのです。そして今度はしばらく国の方へはたよりをせずゐました。然し事件は私が再度の家出後直ぐに解決したそうです。此の間父から知らせてよこしました。

「それでやう～国ともたよりをし合ふやうになつたので御座います。中央新聞に書いた事實は相違の点がまつたく御座いますが、私がいまその男と同棲してゐる事は事實なので御座います。私共はずいぶん去年と今年ひどい目にあひました。いまでもまだ遇ひつづけてゐます。然しそうした苦しい周囲の事情が一層私共の結合をかたくして、私共はいま離れる事の出来ないものなので御座います。(私はまじめに御話してゐるのですが、もしあなたに御不快を與へるやうな失礼な書き方ではないかと気がつきました。もしさうでしたら御許し下さいまし。)それで實は私はあなたの最初の御手紙を拝見しました時に大変に困つ

たのです。それであなたに対してはどうかと存じましたがとにかく男に、あなたの御手紙を示して相談いたしました。そしますと（ママ）男は私より以上に、よくあなたを存じて居りました。勿論あなたのお書きになるものを透してですけれども　そしてあなたが大変にまじめな方であるらしいと云ふ事やそれからいろいろ～その他自分で知つてゐる丈の事を並べて私に説明してくれて、すぐに御返事を出すやうにとすすめてくれました。それでとにかく、お目にかかつた上で、すべてお話しやうと存じましたのです。そして、私はあなたが私の思つたやうにまじめな方であつたら私の話をさう気持ち悪くしてお聞きになる事はあるまいと思ふので御座いました。

「私は今日のあなたの御手紙を拝見して何故お日にかかつたらうといふ事をしみ～`と思ひました。でももしあなたが御許し下さるならば私は、このまま意味もなくお別れするよりも親しいお友達として御交はりして導いて頂き度と思ひます。そうしてなをその上にも御許し下されば私の半身である男にもお会ひになつて下さればどんなに幸でせう。

「私は、今日のあなたのお手紙の一字一句も深い理解と同情をもつて悉くうけ入れる事が出来ますと大きな声で申あげる事の出来る力強さを持つて居ります。自信が御座います。それだけにまた苦しい御座います。私はなんだか犯すべからざる他人のこころをみだりに犯したといふその罪が私には脊負ひきれぬ程の罪に思えてなりません。私はあなたがどんなにお怒りになつてもどうおわびしてよいか分かりません。

「それからエレン、ケイの翻訳のこと、勿論、私のまずしい語学で完成する筈はありません。たしかに男の力によるのです。私も出来るだけ勉強して他人の力などによらずに自分で出来るやうにしたいと心懸けて勉強してゐます。私は、決して、それを、かくしたり偽つたりはしません。私の力の足りない間はそれも仕方が御座いません。私は、どなたかがいけないとでも仰云れば自分一人で出来るまでは決していたしません。ああいふ翻訳の私に出来ないといふ事はたぶんどなたも御承知だらうと存じます。

「生田先生はよくそんなやうな事には注意してゐらつしやる方で御座いますね。新年号の中央公論に出た平塚さんの新しい女といふのも実は私が平塚さんに話してあげた事があるのだといふやうな事を仰云つたといふ事も一寸他で聞きました。

「矢張り、私が力以上に出すぎるのがいけないので御座いましょう。私も本当に、何にも分らない、何にも知らないくせに青鞥に書いたりするのは僭越だとは知つてゐますが、あゝして内部にゐて編輯の手伝ひなんかしてゐますと、原稿がたりなかつたりなんかしますと、余儀なく幼稚な事も生意気な事でも書いて、笑はれなければならないのです。私も実はこの頃何にも書き度くないのです。自分でもそれをさほど苦しいとは存じません。もう少し語学でも勉強して素養を深くして何か實のあるものをつかみ得るまではこれから頑固にだまつてゐやうと存じます。

「つまらない事を永く書きました。何卒御許し下さい。私はすべて申あげる事だけは申あげてしまひましたから、私がこれだけの事を申あげ後れたといふ事をおわびいたしますと同時にすべては、あなたのまじめな判断を御待ちいたします。」

六月二十四日

伊藤野枝

「御手紙只今拝見しました。元より予想してゐた事です。併し何にも悪い事はありません。あなたにも私にもちつとも悪い事はありません。あなたが過日の会合の日にあの事を話さなかつたのが悪かつたと言つて御自身を責められるなら、私も同じく先づ第一にその事を

伺はうとしてみてハッキリ伺はなかつた自分をもまた責めなければなりません。(前便に小林さんのあな事が悪かつたと言いたのはその事です。)私は自らこの事を自分自身に責めません。あなたも御自分にどうか御責めにならず下さい。

「恐らくこの事のために私は打撃を受けるでせう。今もう既に受けてみます。けれども私は育ちます。心に涙を一杯ためて育ちます。

「私はあなたを激動させて済みませんでした。けれど言ひます。私は今自分の取る行動は凡て肯定しようとしませう。大胆に肯定します。自分のためには善いのは勿論、他人のためにもまた善い事になるのを大胆に信じます。あなたは参つてはいけません。どんどん進まねばいけません。

「あなたが私の手紙をその方に御見せ下さつたのを私は非常に喜びます。どうかその後の一切の経過もすつかり御話しなすつて下さい。

「私のあなたに対する愛は、この後更に育つか、途中で枯れるか、それとも他の愛に処をゆずつて退くか、何とも自分には今解りません。御手紙には友達として云々とありましたけれど、私は自分が今のこの心の激動を堪えたままにあなたとその方に御会ひする事は少くとも御互ひの幸福に資する道ではないように思ひますから、暫く離れてみようと思ひます。若しも静かに幸福に鼎座して御会ひが出来ようになつたら無論喜んで進んでその事を御願ひしようと思ひます。若しもこの上あなたに御会ひして見て、私のラヴが消し得ず助長するようになつたら大変です。この事はどうぞ誤解をなさらずに下さい。私は今その方に非常にいい感じを持つてゐるのです。

「もう後はただ自分自身の事のみで何もあなたに御話すべき事はないように思ひます。若しも今あなたの心に少しでも傷がついたらその傷を癒す力はその方の手中にあります。あなたの幸福がそこにあります。

「あなたの幸福を祈ります。」(二十六日午後御手紙を拝見した直ぐ)

僕は読み終ると直ぐにこの返事を書いた。そして自分で出しに出て、気持を静めに再びさつきとおんなしところを歩いて帰つた。僕はそれから自分がどうしてゐるうちに、日が暮れて晩になつたか覚えてゐない。僕はそのうち遅くなつてまた紙を展べた。

「拝啓 私は昂奮し激動しつつ書いた手紙にこの事を終らせたくないと思ひますから、今静かな気持でもう一度あなたに宛ててこの紙を展べさせて頂きます。

「この数日間私は実によく生きました。御手紙で拝見しますとあなたも随分苦しまれたやうですが、私も苦しみました。實は遣りかけてゐる仕事 - 食ふための無味な仕事 - を昨日までに終つてそれからゆつくり御会ひしたく思つてゐたのですが、ああいふ訳で私は徹夜の勞れと、その勞れから来た熱との間で、指が痛くなるほど、遅らしてあつた仕事と闘ひながら凡てあれらの手紙をあなたに書いたのです。今日の御手紙を頂いた時も私は仕事をしてゐました、直ぐ御返事を書いてその辺を一廻りして帰ると私の頭は割れるやうでした、私は仕事を放棄しました。もう今月は遣らない事にしまひました。さうして電氣をつけずにだんだん暗くなつてゆく中でジイッとしてゐました。今この時間は私が自分のものとして、ほんとに自分を生かし得る時間だと思ふと、私は不思議な慰樂に勞れた心を撫でさされる思ひがしました。それから電氣をつけて私はまたあなたの御手紙を繰り返しました。それからある尊敬する友達に宛ててかういふ葉書を書きました。

「『恋が終つた。ロストに終つた。この数日間僕は随分よく生きた。毎日手紙を書きつづけた。それで今日その返事が来た。その返事で以て僕の運命が定まつた。がしかし僕は大きなものを得た。僕は女の真実を得た。』

「『僕はちつとも今苦しくはない。といふのはほんとでないかも知れない。苦しい、苦しい。けれども僕にはその苦しさを蔽ふ力と明るさがある。僕の心の底の底には凡てのものを癒す敬虔な真実な涙がある。僕は今自身に実にいい生き方の出来るのを感謝してゐる。』

「今これを書いてゐる時、窓の外には真黒な八つ手の葉の上を風が渡つて、その快い風が私を蘇らすやうにして頬に触れます。さうです。私は蘇へる思ひです。あなたと、あなたの方と、それから私と、この三人の関係が今私にはハッキリと解るのです。今の私の気持は前便の手紙を書いた私とはかなり違つてゐます。

「私のあなたに懐いたラヴはもう消えました。この数日間あはただしい激越な短命な生き方をしたそのラヴはもう終わりました。それといふのには私はそれを尚生かすより、このまま消えてゆかした方が、更によりよく自分を生かし得る道である事を悟つたからです。私は今人間の心の中にアルトルイズム（利他主義）とイゴイズムとが完全に一致する事を信じてゐる一人です。ある友達が言つた通りにさういふ思想が世界の基督以来の最大な思想であるのを信じようとする一人です。この信念が今私には自身のラヴを終らしめよと命ずるのです。私はこの自分ほど自己に対して恭敬なものはあるまいと信じてゐます。

「私は前の手紙であなたにある不安を残しはしなかつたかと今掛念します。物を慎重に言はなかつたのを後悔します。私は今はあなたに対して静かな尊敬と友情の外何物も感じてはをりません。ラヴからかういふ友情へ、私の心はこの数時間のうちに至極自然な推移をしました。特にこの事は申して置きます。それは不自然なセルフ、サクリファイズ（自己犠牲）のためでもなんでもありません。少しもフォオスド（強制）されたものではありません。

「私のためにはかうしてあなたを知つたのは前とは違つた意味に於ての喜びです。あなたと私とふたりはいい道を通りました。また御会ひしてこの友情を続ける機会も、至極自然に近くに来るような気がしてゐます。なんにも故意に避けてはいけなさと思ひます 自分自身をさへ信じてみれば。

「御手紙の模様で拝見しまして、あなたの近い過去に就いては読む私も苦しいやうな同情を懐きました。あなたはこれからも随分艱難な（ママ）道を進んでゆかれる事であらうと想像されます。私も過去には暗い艱難の道を通つてここまで辿り着いたものです。これから先にも尚と一層の艱苦を想望してゐるものです。お互ひに未来と自己とを信ずる力を失ひたくないと思ひます。

「しみじみとして底から力の湧くのが感じられる晩です。この苦しい、併しいい人類の生活を祝福させずには措かないやうな力が心の底から湧き上つて来るのを感じさせる晩です。私はかういふ力を凡ての人類が感じる時は、何れ確かに来る事を信じてゐます。その時地上は幸福に充ちて、世界が光り輝きます。私はそれを想望する時、心に涙が湧き上ります。私はさういふ世界の来る事を早めるために、十字架を背負つて生きたいとしてゐるのです。

「随分いろいろの事をあなたには申しました。私はあなたが深い理解と同情で私を遇して下さると言はれた言葉を力強く思つてゐます。私はこの短いあなたとのラヴに生き得た自己を決して不幸だとは思ひません - 特にあの最後の原稿紙に書かれた御手紙に接する事を得た私は。私は自分を祝福します。凡てのものを祝福します。今自分が幸福ですから、凡

ての人を幸福であらせたく思ひます。切にあなたを幸福であらせたく思ひます。あなたが幸福でなければ自分も幸福になり得ないのを感じます。これは安価なオールド、ファッションド、センチメントではありません。凡ての人類に対して私が今懐く愛です。唯一の私の齋く眞善美の源の力です。

「いつまで書いても限りはなささうに思はれますからこれで筆を擱きます。

「あなたは何より自分で自分を信じさせる力を私に試させて下さいました。私はあなたに御会ひしたため、血から肉から自分が一層純に新たになつたのを感じます。私はこれからまた更に新しい人生の道に上らうと思ひます。

「生田氏の事に就いては同感です。今の日本の文壇の人達は大概下らないモツブです。僕等の仕事は多くの日本の文士や友達の下らなさに愛相を尽かしてゐる事が第一の出発点です。もうこのごろでは今の僕等の同人以外の二三の人を除いては目にすらも這入つて来ません。さういふ反感を懐く事さへ馬鹿らしくなつてゐます。僕等の仕事は大変な仕事です。精神的の日本を作り上げる事です。日本を世界的にする事です、さうして人類を生かす事です。僕等が一生懸つて出来るか出来ないか知れない事です。けれども自己を眞実に生かせば、必ず出来るといふ事を信じて、そのために全力を挙げようとしてゐるのです。僕等はみんな悲壯な感を懐いてゐます。みんな殺気を含んでゐます。歴々として戦ひの勝算を数へてゐます。

「あなたもシッカリ周囲を見定めて御みでになる事を祈ります。

「あなたの方に対する手紙を同封します。それには凡ての経過をあなたがその方に御話し下すつた事を予想した上で書きます。

「ではこれで失礼します。」（二十六日夜半）

「拝啓 未知の私からして、あなたにこのたびの一切の事を御詫びを申し上げます。私は私の手紙と、それから野枝さんの理解を透した経過のいきさつに依つて、私があなたにもまた理解して頂ける事を信じようと致してをります。さうしてあなたが最初から私を信じてみて下すつた事をこの上なく感謝致します。今私には私かにあなたの信認に背かなかつたといふだけの自信があります。野枝さんと私とはこの数日間自由な信実な接触を致しました。さうしてよくお互いの境界をすっかり領解し合ひました。私は常に正直でありたいと思つてゐます。偉大なる正直になりたいとする事は、私が畢生の冀求とし、また願望とするところであります。私はシンセリティ（誠実さ）を自己の最大の宝にしく思つてをります。

「いつかあなたと自然に御会ひする時が来るかも知れません。私はその時少しも蔭を件はずしてお会ひが出来る事を期します。ほんとうにあなたには私は非常な感謝を致します。」

疲れた。僕は書き終つた時困憊の極に達した。尚この事を僕はよく考へたく思つたけれど、もうどうするといふ気力もなかつた。僕はぶったをれて寝てしまつた。

僕は翌朝不思議に早く目が覚めた。すると目覚めた瞬間、直ちに前日の事が一切頭に上つた。僕は起きると早々、昨日の野枝氏の手紙と、出さずにあつた最後の僕の手紙をもう一度読み返した。

僕は自分が昨日大きなミステイクしてゐた（ママ）事に気がついた。僕は最初に野枝氏

の手紙を前後あべこべに読んだのである。そのため女の心の経過が僕の頭へ順に這入つて来なかつた。僕の最初の手紙に対して女が二十四日附の長い返事を書いて出さうとしてから、続いて僕から行つたその後の三通の手紙を手にして、それがそのまま出せずに苦しみ迷つて、漸く二十五日の晩に今一通の手紙を書いて一緒に出したといふその経過がすっかり頭へ這入つて来なかつた。僕には昨日ただ、前に女が僕に知らさうとして書いた事實のみ強く迫つた。「はっきりした意識の下に真実に男を愛してゐる」といひ、女と男が「いま離れる事の出来ないもの」になつてるといひ、ただこれからは「親しい友達として交はつて呉れ」と書いてあるその前の手紙が僕には女の最後の答えのやうに取れた。今静かに見れば女はそれから明らかに動揺してゐる。ほとんど一切の解決を僕の手に乗せて来てゐる。

僕は今自分が非常にむづかしいケエスに臨んでゐるのを感じた。

女の幸福？ 僕は女のこれまでの男を知らない。ただその男に対する好意と愛があるのみだ。或ひは女の幸福はもうその男の手中にはないかも知れない。僕の手の中に移つてしまつてゐるかも知れない。僕にはどうもさう思はれる。だが併しその幸福は女自身選ぶべきだ。

今僕が夫の苦痛を肯定して女を取れるのは、自分がこの女なしにどうしてもよく生きられぬ場合である。僕はまだその場合には臨んでゐない。僕は女と離れば、男に対する愛と自身の生活を優に立派に両立させ得る。

そこで女が誠に生きてゆく道を知る女なら、かうしてこれきり僕と離れてゆく事を堪えがたく思つて自ら自分の最上の幸福が何処にあるかを知らねばならない。感じねばならない。すれば女はこの際僕を愛する事が一番自分を生かす道だと知るだらう。さうしてやがて僕のところへ来るだらう。僕には一面女と女のミリュウ（環境）をまだすつかりとはよく知らぬといふ不安が起つた。一面更に女がその事を知つて、さうして自ら進んで遣つて来る力を持つてゐるかどうかのプルウフ（証拠）が得たくなつた。もう僕は實に女に生きてゐる。僕は自分の今の勝利を更に一層高価な勝利に進ませたいと考へた。でもしこの女がその女なら、僕はこの人なしに最上の生き方が出来なくなる。僕はどうしてもそれなしに生きられぬ愛に面する。僕はその時新たに自身に蘇へる恋愛を窮極の生き方にする。僕には僕が離れても女はいつかさうして近づいて来さうに思へた。女がその事をよく意識せず、新たな関係 - 友達としての関係 - として近づいて来ても、ふたりの間には必然にまたこのラヴが蘇へる。その時ふたりは始めてほんとうに結合する。その新しい関係を自ら開き得る女にして始めて僕のほんとうに取るべき女だ。僕はその自身の運命の鍵を女に與へる。僕は運命を信じてゐる。その来る事も来ないのも共に何れも運命が僕を一番よく生かさうとするためにのみ取る道なのを信じてゐる。もとより永久に僕は夫に蔭なく会へる。

かう考へて、僕は午ごろ昨夜の手紙を投函した。続いて今のかういふ気持も書いて送らうとしたが、それには如何にも自分が勞れ切つてゐる事を感じた。

そのうち土屋君が来て、僕は暫らく話して、夕方一緒に牛込の千家（元曆）君の家へ行つた。岸田（劉生）君と弟がゐた。僕はこのアツフエエアをみんなに話して、その晩はそこへ泊つた。このごろ僕等は寄りさへすれば大概徹夜だ。僕は勞れてみんなが話してゐる間少し眠つて、それから夜中に起きて話に加はつた。それからみんなして暁方になつて騒いだ。寝たのは七時ごろであつた。

午ごろ僕は一番先きに目を覚ました。僕はみんなが寝てゐるうちにひとりして起きてしまつた。野枝氏の事が頭に自然に泛んで来た。それを頭に泛べてひとり考へてゐるうち、

この今の - 一昨日の晩僕の最後の手紙を書いてから後の自分の考へを野枝氏に伝えたい気が頻りにして来た。それを伝える事が一種の自分の責任であると思はれるような気が頻りにして来た。僕はこの際野枝氏が来れば、迎える事を敢て辞さうとするものではない。寧ろ喜んで相抱かうとしてゐるものだ。といふ事をどうしても書いて伝えたく思つた。僕は机を引き寄せてその事を書かうとしたが、それよりもう一度会つて委細に話した方がいいやうに思はれた。それで簡単に、「自分は前便の手紙で尚いひ洩らした事があるのを感じてゐる。そして自分はある責任を覚えつつあなたにその事を話したく思つてゐる。それはあなたの幸福に更に資さうとするためだ。就いては至急御都合で今一度御会ひしたい。」といふ意味の事を書いた。

晩方僕は今の手紙を懐ろにして宿へ歸つた。そこからこれを出さうと思つたのである。すると婢が手紙を渡した。野枝氏の手紙だ。今日午ごろに留守に届いたのださうだ。

僕はその手紙を受け取ると、直ぐ僕の部屋へ馳け上つて行つて急いで開いた。

「昨日文祥堂からあの手紙を出しましてから私は一寸の間も静かな落ち付いた気持である事が出来ませんでした。いま拝見しましたお手紙をどんな恐ろしい不安にかられて待ちましたでせう。

「木村様、私はもうあれ以上に申あぐる何物をも持ちません。この御手紙を拝見しては何にも申あげられません。けれども私は何だか私は(ママ)ただだまつてゐられないやうな気が致します。けれども私は今何を申あげやうとするのでせう。自分でも何だか分かりません。御許し下さいまし。私はこのままあなたとはなれて行く事が非常に哀しく思はれます。さびしくおもはれます。私は、あなたにおあいしてからすつかり平静を破られてしまひました。私はいま、一人てぢつとしてゐられません。私は、あなたにどうしてももう一度おあいしたいと思ひます。激した私のいまの心は何にもお話なんか出来ないかもしれせんけれどもどうしてもお目にかかり度く思ひます。でもそれがあなたに更に打撃を加へるもので御座いましたらあきらめて自然の機会を待ちます、ああ私は今あなたに何を申あげやうとするのでせう。私は自分が分からなくなりました。矢張り私が悪かつたのです。本当に何卒御許し下さいまし。

「昨日麹町まで行きましたからお自にかかり度いと思ひましたけれどもあの辺は不案内でちつとも分かりませんし、それに丁度あの手紙がお手許に届いたと思はれる時でしたから私は直ぐにかへつてまゐりました。何だかちつともおちつけませんので何を書いてゐるのやら自分でも分かりません。

「何卒よろしく御推読下さいまし。私はもう苦しくてたまりません。もしもう一度おめにかかる事が出来れば少しはしづめる事が出来るかと思ひます。

「乱筆御許し下さいまし。」 野 枝

僕は俄かに堤が切れたかと思ふばかりに、急に自分が奔騰し出すのを感じた。

直ぐ僕はこれから出さうとしてゐた手紙の余白にかう書き加へた。

(今御手紙を拝しました。御出で下さい。御待ちします。来なければいけません。あなたはほんとに生きられるのです。どうしても来なければいけません。必ず必ず。恐れてはいけません。僕はあなたを生かします、明二十九日夜分から三十日の夕方までは僕は必ず在宅します。是非来なければいけないのです。)

と僕は決意を示して書いて、尚詳細に僕の宿所の道筋の図を書き添へた。

僕はもう会ふまでどうしてゐる事も出来さうもなく感じた。

僕はその手紙を持つて家を出て、それを投函すると、直ぐ築地行きの電車に乗つた。僕は電車の中でまた今の手紙を開いた。女は僕の最後の手紙を見てこれを書いたのだろうか。ただ文面ではその前のだけ見て書いたのかとも思はれる。ふとその事が気になつて僕は消印を調べて見た。二十八日午前八時と十時の間に巣鴨を出たので、麹町へは十時と十二時の間に着いてゐるのである。よし。僕の最後の手紙がここを出たのは二十七日の午少し過ぎであつた。この手紙をば出す前女は確かに僕のすべての手紙を受け取つて読んだ筈だ。と思ふと僕は思ひきり力を籠めて後ろから突き飛ばされたやうに感じた。と同時に恃むところのある自分自身も激しく地を蹴つて水に落ち入つてゆく場合に似てゐる力と一種の心安さを感じた。永代を渡つて黒髪橋の先きになる福士（幸次郎）君の家へ行つたのはもう大分遅くなつてからであつた。僕はそこでもまた一切の事を話した。それからかなり遅くまで、その夜も僕等は互ひの生活を話し合つた。

翌日の夕方帰つて、僕は激しく焦燥したが、その夜は空しく待ちぼうけた。僕は不安を感じ出した。僕は心が次第に不安に苦しめば苦しむにつれ、更に一層自分が女に牽かれてゆくのを明らかに感じ出した。

次の日僕は早くから自が覺めてしまつた。午まで僕はどんなに心を痛めてゐて送つたらう。どんなに何も手につかず、どんなに神経が鋭くなつて、一々下の一切の微かな物音さへも聞き洩らさずにゐて送つたらう。空しく待つて十二時を打つともう僕はゐても立つてもゐられなくなり出して来た。不安は大きくなるばかりだ。僕は女が男に引き止められてゐるさまを想像した。女が急に過度の傷心のために身体を悪くして寝てゐるさまを想像した。

僕は戸外へ飛び出した。そして殆んど前後の考へを失つて打電した。

「ゼヒケフキテクダサイ」

そして帰ると少し気持が鎮まつた。

僕は飽くまで自己をマスタア（制御）してゐなければならなく思つた。でこの今の力を制しに更に他の強い力を借らうとした。この今の嵐を凌ぎに更に他の大きな嵐に自分を投げようとした。僕は原稿紙を展べて今しも自分の墜つてゐる境界を書かうとした。この僕の企ては成功した。僕はそれから数時間、名状し得ない創作の苦惱と歓喜の中に全身没頭しつつ、この堪えがたい時を忘れてゐて送る事が出来た。

やがて夕方近くなつたが女は遣つて来るけはひもない。僕はまた静かにしてゐられなくなり出して来た。僕は出懸ける事にした。出懸けて女に会ふ事にした。もしそこに男がゐたら僕はその男にも会ふ氣になつた。僕には利害は解らない。ただ僕にはもうどうしてもかう静かに待つてゐる事が出来ない。

僕はもし留守に伊藤といふ人が来たら、渡して帰るまで待たして置いて呉れと婢にいひ置いて手紙を渡した。手紙の中に、「僕はあなたのところへゆきます。もしここへおゐでになつたのなら暫らく御待ちになつて下さい。直ぐ帰ります。必ずお待ちになつて下さい。ふたりは今や運命の途上にあります。」とのみ僕は走り書きした。

染井は番地が滅茶苦茶に飛んでゐる。僕は幾度かゆきかへりして散々探しあぐねた末に、漸くそれらしい家の前へ出た。窓越しに外から見えるところで、その家に机に対つてゐる人があるのを目にして、僕は尋ねて見た。

「この辺に辻さんとおつしゃる方は？」

「私が辻です。」

とその人がいつた。

僕はまだ気がつかなくつた。

「伊藤さんおゐですか。」

「出ました　どなたです。」

僕は途端にハッとした。その人の表情がすべてを語つた。辻氏は何ともいひ得ない表情をした。極度のアジテーションがその顔に上つた。僕はその痛ましい表情を見た時胸が痛く感じた。

直ぐ僕は、

「木村です。」

といつた。

「さ、どうぞ御上り下さい。」

と辻氏がいふままに僕は上つた。

「野枝さんはどちらへおゐでになりました？」

と僕は挨拶し終つて直ぐに尋ねた。

「あなたから電報で　あなたのところへ伺つた筈ですが。」

「いつごろお出かけになりました？」

「今日私は出懸けてゐまして、その留守に行つたのです。」

「あ、さうですか。一昨日野枝さんから手紙で会ひたいとして下さつたものですから、昨日と今日とお待ちするといふ返事を差上げたのでしたけれどもおゐでがないものですから、それで電報を打つたのです。」

といつて僕は野枝氏に僕の所に待つてゐて貰ふようにいひ置いて来た事を話して、直ぐに帰らうとした。

僕は無意識の間に辻氏を圧倒し得てゐるのを感じた。僕は対当の力で迫つて来ない人に敬意を払い得ない。

辻氏はその時機の上にあつた書きかけの原稿紙を僕の前に出した。僕への返事として書いたものだ。

僕は直ぐさま読み下した。

「御手紙拝見いたしました。私の心には今さまざまのものが湧き起つて居ります。なにかから申し上げてよいか解りません。私は先づあなたの御手紙が私のこれまで受取つたものの中で最も誠實なる人間の心を現はしてゐるものだといふことを感ぜずにはゐられません。而して私は今又改めて深く自己に対する省察の機を與へられたことを感謝いたします。若し私どもがあなたの御手紙によつて何等の激励をも与へられない様なものでありましたら如何でせう - 私どもは又自己の生命の力をハッキリ感ずることが出来たのです。

「私はあなたを理解することが出来ると信じます。(勿論私の程度の範囲内に於て) 而して又あなたが私を理解して下さることを信じて居ります。あなたは私が初めからあなたを信じたといふことに就て感謝を表はしておいでです。しかしその私の信頼には人間の弱点が供つてゐたことを私は告白いたします。しかし私は努めてそれに打勝たうと試みました。御手紙は皆な気持よく拝見いたしました。殊に昨日御手紙の中に現はれた偉大なる信念(ここまで読むと僕は馬鹿々々しくなつた。今までの好意が全く消え失せた。僕はこのごろ實

に屢々烈しく衆愚の言行に自身の愛を裏切られて苦しむ。今もまた新らしく僕はその事を感じずにあられなかつた。でもとにかく僕は急いで終ひまで走り読みした。) に対しては無限の尊敬を払ひたいと思ひます。私の微かに認め得た光が忽然として全地に漲がり溢れた如く感ぜられました。愛他主義と自我主義との完全なる一致を信ずることの出来ないものは一生迷つて生さなければならぬでせう。私もこれには随分と苦しめられました。且て幼稚な基督教徒でありました私は愛他主義の信者で御座いました。しかしその後私の愛他主義には多くの不純なる分子の混合せられてゐることを発見しました。過去の宗教を脱した私はやがて自我主義者になりました。勿論私は進みました。しかしその自我主義は徹底したものではありませんでした。ただ自我主義が愛他主義よりも更らに純であるといふ様なことを漠然と信じて居りました。けれども私の自我主義はいたる処に恐しい矛盾を感じてゐました。私は強ひてエゴイストを装ふてゐたのです。ですが又そう安々と二者の調和一致を信ずることも出来ませんでした。

「私は今出来得る丈あなたに私を御知らせしたいと思つて居ります。そうして私が如何位の程度迄あなたに接触することが出来るかを見たいと思ひます。私は今如何したら最もよく私を御知らせすることが出来るかと色々考へました末、クダ～～しい思想上の経歴や境遇を御話いたすより一層手取早く又明らかに自分といふものを見て頂くことが出来ると信じますので、昨年暫時野枝子と別れて居りました節、彼女に宛てて書きましたものから少々抜いて御自にかけることにいたしました。或は御迷惑かも知れませんが何卒御一読下さることを切に御願ひいたします。

「『人間は自分のほんとうの心持といふものを中々そのままに現はすことが出来ないものだ。現はす様なことを口にしながらやつぱり俺れを兎角いつわりたいものだ。私は汝に対する心持を今出来るだけ欺かずに書いてみたいと思ふ・・・若し過去のことを充(ママ)るならどうか真実のことを話して呉れ。そうすれば己も気がすむ・・・俺は汝に堅い決心を促がした時に、まづ俺がかなりにさらけ出されてゐるものを汝にみせて、俺はこんな男だ、こんな男でよければそれを充分承知の上で一緒に生活してくれ・・・俺は自分の全てをさらけ出してその上で俺を愛して呉れる様な女でなければ満足し得ないのである。俺はやはり理解といふことを求める。俺は改めていふ　今まで己の接した女の中で最もよく俺を理解したものは汝である。俺は先づこの点に於て感謝しなければならない。それから汝の方から云つても恐らく俺が一番よく汝を理解してやつた男なのかも知れない、と俺は思つてゐる。俺はだから先づ俺が最も敬愛し、眞に愛をそそぎ得ると信じた女に書いた手紙を汝に見せた。然し俺はその女から逆に理解を得なかつた。俺は強ひて求めたくなかつた。理解のない女を如何して愛し得やう。理解と信仰のない愛は虚偽の愛である・・・

「『今日は朝から嫌な日だ。涼しい様な蒸し暑い様なそれで雲足が非常に早く如何してもあれ気味だ。俺は朝飯をすますとすぐと出かけた。行きたくない処へ行くのだから気が少しも進まない。實に今日は耐らない(ママ)気持の悪い日だ。かへりがけに雨に降られてこないだ一寸話して置いたヴァイオリン弾きの処で雨止をして午近くに戻つてきた。午後からも只だ仰向にひつくりかへつてゐると、身体がアチコチと痛んで足の筋が妙につる。そうして倦怠が節々からみついてゐると見えて、俺は幾度か身体の向を変へてみた。それでも駄目だ。乱れた妄想が無暗に湧き起る。俺はどう～～また恐しく暗い気持を抱かねばならない様になつた。

『夜になつてからは殊に喰入る様な淋しさがおそふてきて、俺はさなきだに汝の事を考へずにはゐられなかつた・・・さぞ切ない青ざめた日を送つてゐることだらう。俺はだがこの間の手紙にはかなり強さうなことを書いたから幾分かあれで慰められてゐるだらうが、なんにしる離れてゐては埒があかない。そう思ふともう我慢がしきれなくなる程、汝が恋しくなる。いつそ如何なつてもかまはないから二人で行くところまで行つてみやうかといふ様なことを考へる。突きつめた上で生きるとも死ぬともどつちかに方がつくことだらう。兎に角こんな風な生活をしてゐたら必ず生命が縮まるに相異なる・・・(三十一日)

『とう～～暴風雨になつた。暁方眼が醒めると恐しい風の音と雨のしぶきが、入り交じつて聞えてくる。俺は一端起きてみたが身体に熱があつてけだるいのでまた床に入つた。ウト～～したかと思ふとその内おびやかされる様に眼が醒めた。郵便だつた。俺は思はず胸の鼓動を感じた。母と妹とはその時もう起きてゐた。俺は確かに汝からの手紙に相異ないと思つて、床の中で封を開く前の危倶を抱いた。俺は飯をすますと嬉しさと懐かしさと不安との入り混つた妙な心持で封を開いた。而して一気に読み終つた。

『読み終つた時、俺は非常な憤りを覚えた。習俗に対する強い反抗である。こんなことと知つたらオメ～～汝をかへすのではなかつた。實にばかげた徒勞であつた。がしかしだ。俺等はかくの如き苦しみを忍ばなければならないといふことは、これによつて更に深く強く俺等が結び合はれるのであると考へると、そこに云ふべかざる希望と歡喜とが湧き起つてくる。俺は徒らに感情に走るのではない。落付て考へての上である・・・あらゆる絶望と圧迫とを蒙りながら悶え苦しみ哭き　　そうして愈々痛切なる夢に生きるのである。俺等は幸福だ。(- 日)

『この二三日は實に耐らなく苦しい情調にゐる。私は自分がそれを充分に書き現すことの出来ないのをひたすら悲しむばかりだ・・・俺は朝から晩まで汝の事を考へてゐる。而してもうどうなつてもいいから遇ひたいと思ふ。それ以外にない。後はどうなつても只だ遇ふことが出来さへすればいい。話が破れたらすぐ出て来ると云つた。俺は早く破れてしまへばいいと思つてゐる。それにしても汝が無事に再び上京することが出来るだらうか、と考へるとそれがもう非常に不安な暗い苦しい気分を誘つてくる・・・それに昨日などは又夕方から食ふ米がないと云つて母が心配し初めた、俺はもうどうでもなれと思つて黙つてゐた・・・俺は全く肝癢が起つてきた。こんな時、もし汝がもう少し弱い女と一緒に死んでくれと云つたら、俺は前後を考へて而して矢張落着て死に得るかも知れない・・・だが又一方では妙に冷やかな理智が頭を擡げて俺を冷笑する。そうして感情の玩具になつて泣いたりわめいたりしてゐるのを如何にも気の毒な風に見下してゐる・・・。

『なんにしても俺は痛切に汝を求めてゐるのだ、到底空想で相抱いてゐると云つた丈では如何して満足し得やう・・・もし汝が變心して俺から離れてでも行く得(ママ)なことがあつたら、俺はもうその時はどんな痛ましい苦い～～杯を飲まなければならないであらう。そう考へてくるともうまるで意識といふものを失つてしまふ様だ・・・俺はどうか今の様にいつまでも俺を愛してくれと汝に訴る。』

僕は読み終ると直き別れた。

「お互いにアンダアスタンディングがゆき違ふと困りますから。」

といふ辻氏の言葉を僕は殆んど聞き流しにして戸外へ出た。僕の心は決してゐた。

僕はそれから巢鴨橋まで馳け通した。電車の中でふと僕は今後にして来た辻氏の苦痛を

想像した。冷やかにハッキリとしてその事が頭に上つた。がただ僕は仕方がないと思ふ外はなかつた。僕等の牽引は自然だから。僕等の結合は自然だから。

神保町から青山行きに乗つて、半蔵門で降りると、新宿行きの電車はと絶えてみて遣つて来ない。僕はそこから三四丁自分の宿までまた馳け出した。いきせき切つて馳け出して、漸く着いて、僕は入口のガラス戸越しに中を覗いた。土間には見覚えのある下駄が脱ぎ棄ててある。僕はその時ホツとした。

急いで部屋へ這入ると、女は入口の壁際に慎ましやかに座つてゐた。僕は直ぐには息がはずんで口きく（ママ）事が出来なかつた。

僕は女の顔を見て驚いた。ただ眞白で血の気もささない。少しも表情が泛ばない。恋ひしてゐるものの顔ではなくて、ただ激動の果に悩み苦しんでゐるものの顔である。殆んど凝結してしまつてゐるやうなその顔が寧ろ僕にはいひ得ない恐怖をさそつた。今やかうして会つてゐるのに少しも僕には予期してゐたエクスタシイが得られない。今対ひ合つてゐるのが僕にあの最後の手紙を書いた女とは思ひ得ない。

僕はこの事を意識していらした。が強ひて気持を鎮めて僕は話し出した。すると話してゆけばゆくほど、僕は自分が次第に冷静になつてゆく事を感じた。

「大変御待ちなすつたでせう。」

「ええ、でもそんなでもありませんでした。出懸けに社へ寄りますと人が来たもんですから遅くなつて それから処が解らなかつたものですから大変に探しました。」

「処？ 僕は手紙にちゃんと図を書いて置いたでせう。」

「私その御手紙を拝見しません。」

といつて女は首をかしげた。

僕は非常に不快を感じた。以前に二通番地を落して出してさへ届いた手紙が、今度はそれがすっかり書いてあるのに届かぬといふ筈がない。

が僕はますます落ちつくのみだ。僕はその不快を隠した。女が自らその事を判断するにのみ任さうとした。でただその手紙の内容だけを話した。

女は黙つてゐてそれを聞いた。

そのうちに僕はまたふたりの間に何かはぐれてゐるものがあるのを感じた。この際僕等はただ深い沈黙のうちに相對しさへすればいい筈である。すべてのものがふたりの間にその沈黙のうちに交通する筈である。すべての歡喜とすべての忘我にふたりは身を任せ去つて、さうして互ひに強い相互の結合をのみただ深く意識する筈である。それが無い。その忘我に身を浸す事が出来ない。

なにかがはぐれ去つてゐる。なにかまだふたりの間に熟し切らないものがある。

とさう思ふと僕はますます冷静になるばかりだ。

僕はこの二三日の自分の気持をすっかり話した。

今朝僕のところへは焦慮して女を待つうち昨夕別れた福士君の手紙が来た。僕はその手紙を見て感動した。さうして烈しく涙を流した。僕はその事を話して女に手紙を示した。すると野枝氏は受け取つて熱心に読んで行つた。

「實にいいと思ふ。自分は野枝さんに感心した。野枝さんに其処まで這入つて行つた君を感心した。自分の今見てゐるものは君が野枝さんを所有してゐる生活である。自分はこの事件の一番初めに驚異を感じた。自分は斯くまで女性が自覚し得るものか信じ得なかつたのだ。女性といふものがあんなに迄純粹である、人生の眞の幸福を味ひたい慾求があらう

とは今の時世として信ぜられなかつた。自分は目をつぶつてこの孤独な男性を通過せねばならない事を予期してゐた。後に来るものの為めといふ事を一つの頼みにして自分は茫然として歩いて行つた。

「野枝さんにぶつかつた運命は自分にもぶつかつた運命であつた。

「自分は女性が解つた。ゆふべの事があつて更によく解つた。自分は女に目をひらいた。自分は覚悟した。

「自分はそれだけ今の君の立場の實にむつかしいのを思はずにゐられない。自分は怖い事も随分怖い。(自分は手の出しやうを知らないのだ。)然し君の真実、野枝さんの真実は今瞭然と出てゐる。この両者が結び合はない事が双方に傷つける事ではないにしろ、自分は斯くの如き強い牽引を感じずるものが周囲の事情の為に離れねばならない理由を知らない。

「自分は今まで君のとつて来た道を實に尊敬してゐる。あの最初の手紙の内容を聞いた時、自分は同感した。(この事もいろいろ話す。)その心持が解つた。然し自分はその時何の期待も持たなかつた。自分とても釣針に餌をつけて投げる。然しそれに魚が掛るとまでは自分はどうしても信ぜられない人間であつた。今の人生に向つて自分はそんな予期を持たねばならぬ位の不幸な目を見た人間であつた。自分は後に来る者の為に唯だ自分の信ずる事を及ぶ限りするといふ事しか強いものを持たなかつた。それが自分の殉教的な心であつた。自分が兎角ラヴに冷淡になり勝ちであつたのも斯んな処から来てると思ふ。そして唯だ仕事を仕事をとつた。そしてそれへ全部の血肉を注入したかつた。そこへ自分はあの返事を見た。そして實に今迄知らない驚異の世界を見出した。ゆふべも始めは唯だこの驚異のみであつた。自分はこの真実に対して払ふべき当然の心を知らなかつた。自分の心は無智なものが淨いものを却つて苦痛とする如く『苦痛』とした。片一方では女の人の純粋が自分を既に目醒ましてゐる。自分は自分のラヴした女の人を思ひ出した。いろいろ雑多なものが一時にコンミングル(混合)した。そして切なくなつた。実に心苦しくなつた。二三度吾れ知らず嘔(きょき)(欠)(sob)した。君の手を握つた。(それもいつかもつとよく言ふ事が出来るだらう。)

「自分は君のラヴが之れ程まで立派に出た事に就いて今迄知らない幸福を感じてゐる。自分の見出した最大の一つはこれである。なぜならこれには今迄見た事のない立派な光明がある。元さんのラヴも肯定するが、未だしもそれには暗いものが見える。君にはそれが無い。君の覚めてるものと女の人の覚めてるものとが接触してゐる。その接触のしやうが實に人間の光明面と光明面と加はり合つてゐるのを感じずる(無車君のC子さんとも違ふと思ふ。思ひ切つて言ふならあれは無車君といふ人の人格のラヴだと思ふ。君のはさうでない。もつと覚めた意識が互ひに愛になつてゐる。いふ迄もない事だが。)(無車君=武者小路実篤)それだけ君のラヴが人事でない気がする。僕に非常に交渉がある。直接である。そして更にそれだけ君のラヴがよく解決がつくのを切望する心が強い。万人のものだといふ気が更にする。君一人の幸福でないといふ気が痛切に来る。女の人のハス(夫)はそれは気の毒だ。然し自分はこの結末がきつとよい事を信じてゐる。ハスの問題は後廻しにしてもいいと思ふ。気にする事は少しもないと思ふ。(ハスに呉れといふ事は決して crime ではない。今の処それは最上だ。君の出づべき当然の道だと思ふ。一番立派な事だと思ふ。)兎に角野枝さんにも一度会見したらまた新しいものが出るかもしれない。それを知りたいと思ふ。實に君は立派だよ。唯だハスを気にするといふ事は絶体(ママ)に考へものだ。然もそのハスに対する態度はもう出来てる。唯だもつと野枝さんをよく知りハスをよく知るといふ

事はこの上必要だ。僕は君は暴進的な人でないのを信ずる。そしてうれしいと思ふのは君の現在には底の不安な幸福を君が背負はされてゐないといふ事だ。これはいつまで経つてもないのが本当だと思ふ。それではまた。幸生

「(元さんから葉書が来た。字が踊つてゐる。二日の集会の事と移転の事と、これから莊太君のところへ行く、非常によい事があると躍動して書いてあつた。今度の僕の運命には僕は實に感謝してゐる。ラヴばかりではない。他の事にも影響してブツカツテゐる。) 六月 - 二十九日。」

女は読み終ると黙つてそれを僕の机の上に載せた。

僕はつづいて今日書きかけたこの小説の始め少しと、以前に書いた感想を取り出してまた示した。

「いつか手紙の中であなたに御送りしたいと言つたものはこれです。」

野枝氏はそれをまた読んで行つた。

「始めて未知のY嬢に手紙を出した夜。

その日の午ごろ、私は原稿紙四枚に書いた手紙をポストへ投函してから、ただ何となく気分が落ち着かずにあて、仕事の翻訳も手につかなかつた。私はこのごろ勉めて日毎の時間を利用したく思つてゐるので、それからかういふ気持でゐるのを丁度よい機に、少し溜つてゐた亡友の遺稿の校正を再校とも六七十頁、日が暮れるまでに、一気に片づけた。私は今かうして友達の遺して行つた翻訳を校正しながら、ツルゲエネフの『煙』を始めから読み返してゐる。さうしてもはやこの小説も後半に近づいてゐる。今の私にこの小説はかなり離れて、遠い気持を懐かせるものであつたが、この日はそれをただ機械的に読んでゆくうち、思ひ乱れたリトヒノフの姿が妙に私を牽きつけて行つた。そのため大分校正をしてゆくのにあつた。それから私は夕飯を終つて、ストリンドベルヒの自伝(『痴人の懺悔』)を二枚ばかり訳した。私はそこにも二十六歳の著者が、ライフ、エンド、デツスの闘ひをしてゐる烈しい恋に面した。そのうち私の身内に、このごろ私に実に親しい、猛然とした例の力が湧き上つて来た。私は快く全身に浸み透る力を感じた。それはこれまで私がいくたびとなく徒らに望んで、いくたびか徒らに手から漏らして、焦慮し尽して来た力である。それを私は今内部から、殆んど自身のうちにあると思へぬほどの内部から、痛切に強烈に感じてゐる。私は自分の身心のうちに殆んど破碎し尽されてゆくものがあるのを感じる。そして同時に凄まじい力で生れて来るものがあるのを感じる。ああ、この創作の歡喜に没頭し得る喜び。私は先づその創作の最初の一字を着けに、新しいノオトを買ひに通へ出た。私がこれから書かうとしてゐるものは、天保十二年に始まる父の一生を背景にした、二十五年の私の半生の自伝である。今しも私の前には暗い血と、暗い思想を脱却し得た自分の姿がハッキリと泛んでゐる。私は自分の過去の暗さがどれほどの暗さだつたか、今よくそれを知りたいと思つてゐる。さうしてまた今の自身の明るさが、眞にどれほどの明るさであるかを確かめたく思つてゐる。刻下に私に得られる時間と精力とから推し量るのに、それには優にこれから一二年かかりさうだ。幸ひ私はその一二年自分を喰はず仕事に離れぬといふ保証が得られた。私はかうして自分が制作に生き得る期間を想望する喜びに身を震はしつつ、やがて喜多川の支店の店先に佇んだ。私はそこでノオトを買つて、懐ろにしたが、昂奮が抑え切れずに、到底このまま帰つて一間に坐つてはゐ

られさうもなく思はれた。私は麹町四丁目の電車道から半蔵門の前へ出て、それから真暗な堀端の並木の蔭を伝つて歩いた。

「實は尚あてもなく歩いて、ひとり沈思しながら空想したく思はせられるものが私にはあつたのである。

「今日書いた手紙が先づ胸に泛んで来る。『拝啓』と私はそれを繰り返した。『(以下僕の最初の手紙

以上』とかう繰り返すうちにも私は心が微かに震えた。私は宛名の主が開いてこれを読むさまを想像した。さうして直ぐに返事を出さうか出すまいかとして打ち惑ふさま、または返事の文句に就いてその人が考へ悩む有様を想像した。でまたその人が私を想像する有様を想像した。

「いつか私は隼町の通りを過ぎて、学習院女学部の角へ出てゐた。私は突然自分で自分の思料の糸を断ち切つた。 けれども私が予期する期待は、今たゞこの人を知らうとするだけの事に止まる。で後には何が来てもいい。若しも私に最悪と見へる結果を呈して沈黙といふ答えを得れば、私はこの際私の手紙に対して沈黙するといふ行動で、立派にこの人の判断がつく。私は自分を待つてゐる凡ての運命と慇懃に握手をする 私

は足を早め出した。

「帰つて見るともうかなり遅かつたのに気がついた。私は長篇の始めを少しノオトへ書いた。

「その時はもう遅かつた。で私は間もなく寝に就いた。直ぐに私は勞れてゐて、グツスリと寝込んでしまつた。

「 夜中に急に目が覚めて、私は自分が思ひも寄らない烈しい動悸を覚えてゐるのに吃驚した。私は起き直つたままボンヤリしながら、自分の胸の呼動を計つてみると、その時丁度下の時計が三時打つた(ママ)。私は自分が夢も見ずして二時間熟睡してゐて、そして目覚めたのだといふ事を知つた。その二時間のうちに何事が起つたらうか。と私は怪しまずにはゐられなかつた。やがて氣着いた。さうだ。この私の上には、既にあの人に会つて、さうして激しくあの人を恋ひしてしまつた後に感ずるほどの激動が起つてゐたのだ。私の心のその喘ぎやう。私は深い当惑にと胸をつかれた。その一刹那に私の上には眞に各種の思ひが一時に群つて迫つて来た。私は長い制作の筆を執りそめようとする抑もに方つて、しかも同時にその制作の煩ひとなる恋に自分の手を差し伸べようとしたこの朝の自分の矛盾を強く感じた。とこの矛盾を感じれば感じるほどに、その双方の聳動の眞に自分に自然な、必然なものである事を感じた。私にはまた自分が未知のかの人にかうして懐く思ひが、近くどういふ経過を取るかもまるで窮ひ得ない運命が頼りなかつた。再び私の書いて送つた手紙の中の文句が頭に泛んで来た。

「『或ひは御目にかかつた上ではあなたの個性と私の個性は相反撥し合ふ(といふ言葉には無論私が Y 嬢を蔑視する場合の事も含んでゐる。)性質のものであるかも知れないと思ひます。またはあなたが一層ほんとに私の心に生き始めるようになるかも知れないと思ひます(ママ)。或ひはまた只一個の友達として静かに快く御話する事が出来るかも知れないと思ひます。』

「かう書くほども、私に先立つて何等の予感もし得ない位ひ、この運命が茫漠な姿として自分には現はれてゐる。だがその茫漠としてゐる運命と共に、私は再び言ふが、慇懃な握

手を交はす。私は明るい真理に面した自分の確乎としたこの新らしい要求のままに身を処す。さうして私に自己に対する誠実がある。餓え渴くとも濁つた水を飲まないだけの自己に対する誠實の敵とした選択がある。

「私は夜中に電気を点けて寝る習慣だから、丁度ムクのスリンドベルヒが懸つてゐる壁のところ、この今の位置からは直ぐ目に這入るやうになる。それがこの時目に這入つた。不幸な詩人よ。誰れにも優つて婦人を渴仰しようと望んで、しかも遂には婦人を誰れより憎まずに終り得なかつた不幸な詩人よ。

「といふ私も今やこれから自分の関すべき一生の運命の前に震える。けれどただいい。私にあるもの、血も肉も繊維も凡て今新たである。これから私が書かうとするのは眞の私の処女作だ。これから私が得る人に懸ける思ひは、私の初めの恋よりも尚その力が強くして、その情が尚至純だ。

「私は猛然として跳ね起きた。

「と始めて未知の Y 嬢に手紙を出した日の夜が明け放れてゆく……」(六月十日朝)

「僕は今強くあなたを愛してゐます。」

と女がそれを読み終つた時僕はいつた。

女は黙つてゐて肯いた。

僕は懐ろにしてゐた女の手紙を出した。でその最後の手紙をさしていつた。

「僕はこの手紙をあなたが書いた気持ちをよく御伺ひしたいのです。」

「え。」

と女は暫くしていつた。

「私いろいろ御話したい事があつたのですが、今日さつきの電報でただビックリしてしまつたものですから、今ちつとも何だか解らなくなつてしまつてゐるのです。」

で僕はそれからやはり自分の解釈してゐた通り - 女がその時僕に牽引されて投じて来ようとしたと解釈してゐた通りにそれを解釈した上で、今は自ら自身を辻氏より優良として、女の眞の幸福がただ僕の手の中にのみあると思つてゐるといつた。さうして野枝氏が自らそれを撰ぶ力は、また万人の力でそして光明である。この今の僕の心はただ恣に自身が欲するままに圧倒して迫つて奪ふといふ事をしたくない。でただ自然な結合の前にハンプル(謙虚)に跪きたいとしてゐるのみだといふ事を長く話した。

その時女の額にはたらたら汗が流れ始めた。女は一しきり絶えずハンケチでそれを拭つた。

僕は、

「であなたには辻さんに対する愛があるのですね。」

といつて尋ねた。

「え、あります。」

女はこれには即座に答えた。僕はまたいらいらした。一しきり「どうでもしろ。」といふ氣になつた。でも僕は尚話した。去年出会つたといふ問題からして、女に今はまた更に進んだ問題が展けてゐる。そのいい解決はただ女が飛躍するところのみある。僕はそのすべてに直ちに備へようとしてゐるといふ事を話した。とうとう女は歸つてよく考へて見ると答えた。

それから僕は尚いろいろの事を話した。自身の過去の事を話した。終には今の仕事の事

までかなり詳しく話した。

野枝氏は十時の時計を聞くと別れを告げた。僕も一緒に出る事にした。

通りまで出て僕等は別れた。女は少し歩いてゆくといつてひとりして向ふへ行つた。

僕は別れて反対の側を十間ばかり歩いてゆくうち、ふと今家を出てから通りで、何かの拍子に始めて女が浮べた微笑を思ひ出した。途端に僕は殆んど反射のやうに直ぐ引き返して女の後を追はうとした。そして女を固く、この腕に抱かうとした。

二三十間僕は直ちにおつけて走つて見たが、真暗で、それらしい姿は目にはもう入らなかつた。

僕は気が沈み始めた。「またつっぱなした。」と思ふと、僕はそれをば自身の過ちのやうに心に痛く感じた。

その日は丁度弟と千家君とが赤坂の佐藤君の後へ移つた日なので、そこへ行つて泊つた。

僕は何ともいへない妙な気持である。僕の心の中には不安と期待が相半ばした。この数日間僕は事毎に運命と面接して生きる思ひがした。僕には自身が何処まで自らその運命を開き得てゐて、さうして何処でまたそれを塞いでゐるのか、この時全然解らなくなつてしまつた。でただ僕に知り得る事はこれまで自身がすべてにそれより取りようのない眞に必然の道を取つたといふのみである。

とにかく僕は都合で明後日来て呉れといふ手続を野枝氏に宛てて書いた。

翌る日僕は不安を全然一掃した。ふたりの間に僕の手紙は一通失はれてゐた。そしてふたりは昨日さういふ錯誤の下に置かれて、互ひに自然な感情を流出させる事を妨げられたのである。すべてこのふたりの間の均勢が取れるのは明日である。明日ふたりが会ふ時である。

僕は明るい気持になつた。すべてを信じた。すべてのものを祝福した。

家庭 - すべての人間の憧憬する - すべての人間の心を囚へる - 家庭の夢がまた僕に新たに蘇へつた。一たび幼い恋愛からの早婚の家庭を作つて、さうしてやがて直ちに苦い失望を味つた末、それをば自ら破り棄てて来た僕には、再び自然にその幻影が高まつて蘇つた。僕はこの孤独な今の自身のヴァガボンデエジ（放浪）が終る日の事を夢みた。僕は新たに始まる自身の生涯の事を夢みた。さうして今や僕等少数の日本人が入り得たこの初めての世界の中へ女を導かうとするのは、僕の野枝氏に対する最大の愛であつた。

僕は二日の午前期待に充ちてゐて女を待つた。

九時ごろ婢が、

「昨日の伊藤さんがいらつしやいました。」

といつて取り次いだ。

僕が取り散らしてあつたそこらを片着けるうち、障子を明けて這入つて来たのは、思ひがけない辻氏だ。直ぐその後に野枝氏がつづいた。

三人は対ひ合つた。挨拶が済むと直ぐさま辻氏は野枝氏を顧みてかういつた。

「お前申し上げたらよからう。」

僕は野枝氏を熟と見た。女はうつむいて目を落した。一昨日の晩とはまたまるでその顔が違つてゐる。頬が真赤だ。散々泣いたといふ目付だ。

僕は運命が全く転換し終つてゐるのを感じた。女は全然自由さを失つてゐる。

眞に動いてゐてやむところのないライフだ。僕等は実にその運命の片鱗をだに予測し得ない。が忽ち予想を伴はずして眼前に展げるものがある時僕等が驚異して対するものは、寧ろ自身の心のうちに自らこれまである事を全く知らない力や感情が蔵されてゐて、突嗟にこれに相呼応する事実である。

僕はただ「間抜けな奴だ。」と思つて冷やかに女を見た。

野枝氏はそのままうつむいて黙つてゐる。辻氏が原稿紙を僕に渡した。

僕が受け取つて読みかけようとする、辻氏はいひ添へた。

「お読みになるうち不快に思はれるやうな事が書いてあるかも知れません。」

「僕も先日あなたにいい感じを持ってませんでした。とにかく拝見して見ます。」

といつて僕は続きから読み始めた。

「あなたは偉大なる正直を宝にしたいとおつしやいました。私も同感です。私は昨日あなたに御自にかかつてからの心持、また私の野枝子に対する心持を一切正直に御話したいと思ひます。これは私が今日午前労働の最中、僅かの暇をぬすんで書きつけたものでございます。

『私は今非常に苦しんでゐる。もう落付て仕事なんぞしてゐられなくなる。私は実際昨夜位、おまへに対して深い憎悪を抱いたことは恐らくあるまい。私は幾度も自分の心に湧き上つてくるあさましい嫉妬を消さうと試みた。しかしそれは無駄であつた。而して必然に湧き上る心持を如何することも出来なかつた。私はそれに木村といふ人に対する第一印象があまりよくなかつた。私はあの人に深刻な霊の姿を認めることが出来なかつた。私はなるべく外形に囚はれたくないと思ひ、又自分の愛を奪はふとした - する - 男だといふ様なプレジデンス（先入観）から脱却し、落付た公平な心持を抱きたいと務めた。併し私にはあの人をなんとなくなまめかしい容子（具体的に云へば金縁の眼鏡をかけた、髪をきれいに分けたりしてゐる様子）に少なからず反感を持つた。私はこんなことに囚はれたくないと思つたけれど、それを如何することも出来なかつた。併し私は木村氏が歸つてから又氏の手紙を出して読んで見た。而して私は務めて氏に対する悪感をそそぎ去らうとした。又それからすぐ手紙の続きを書こうと思つたけれど、おまへの歸らない内は到底出来ない。それに書き出せば又どんな事を書くか解らないので、書かずにしまつた。私は少なくともおまへが夕方（母の処に行くことになつてゐるから、而して妹は何辺もそれを云つてゐた）迄にはかへるだらうと思つてゐたけれど、とうとう歸つて来ない。（又歸へる筈はないと思つた。）すると私は木村氏の云つた言葉を思ひ出した。「野枝さんが是非お目にかかりたいとおつしやいましたので」・・・私はそれを聞いた時、そうしてそれを思ひ出した時、おまへが慥かに私に黙つて書いてゐる手紙があるのだらうといふ考へが起ると、私は耐らない憤りを覚えずにはゐられなかつた。それに電報をかけるといふ程、至急におまへに遇ひたいといふ木村氏の態度にも了解出来ない処がある。私の頭はメチヤクチャになつてきた。もう公平な判断なぞ出来なくなつてきた。そのうち日は全く暮れる。妹は私と一緒に待つてくれと云ふ。私はどうしてそんな余裕のある気分になれるだらう。一人で行けとなつた。併し妹は切りに行きたがつてゐる。それに今夜また行かなかつたら、母はさぞ心細く、なさげなく思ふであらうと考へると、俺は實際傍にピストルでもあればこの頭を打貫きたい位に考へた。（母の事は御話しなくつては解りません。一月許り家を出て行衛がわ

からなかつたのです。さうしてやうやく一昨日わかつたのです。長くなりますからこれは略します。)俺はもう全くおまへを俺の心外に投げ出さなければなんにも出来なかつた。(そんな事が出来るだらうか。)私は W の家へ行つて母から色々な泣言をきかされても、俺の頭はそれよりもつと～～痛切な事で一杯になつてゐるので、黙つてきいてゐた。俺は只だもう母がかわいさうだと思つてゐた……

『俺等は歸つてきた。而して私はもう多分おまへが歸つてきてゐるだらうと、そればかりを考へてゐた。が、おまへは歸つてゐない。私は絶望のドン底に沈んでしまつた。なんにもする気が起らない。木村氏に手紙を書く元気もなくなつてしまつた。しかし黙つて考へてゐると愈々ゐても立つてもゐられない様な心持になつたから仕方なしに又仕事を初めたのだ。おまへが歸つて来た時、おまへの眼鏡をかけてゐる姿(これも説明しないではわからないでせう。野枝子はたいした近眼でもありません。眼鏡は校正にでも行く時の他かけないので。それも私の眼鏡なのです。)を一目見た時、俺は今迄隠されてゐた『女の浅薄』をまざ～～と見せつけられた様に感じた。そうしておまへが見え透いた様な(野枝子は - 眼がチカ～～するものですから - と云ひました。)弁解をした時、俺は愈々腹が立つた。而してなさげなく思つた。私はどうか今夜の心持を曖昧に葬り去りたくなかつた。私はおまへの心が慥かに動揺してゐると思つてゐると思つてゐると思つてゐると思つてゐると思つた。おまへは俺と生活するより以上によい生きかたが出来ると信ずる男があれば、俺はその時、おまへを止める資格はないと思ふ。而して又その様な気持を始終持つて生活するの苦痛に俺は恐らく耐へられまい。私は私自からのために私を愛してくれる女を要求したのである。而して今迄は汝が確かに俺を信じ、俺を愛し、俺と一緒に苦しんでくれたことは私にはよくわかつてゐる、私等の関係はしかし常に進まなければならないと思ふ。出来る丈け深く触れ合はなければならないと思つてゐる。出来得る丈真実でなければならないと思つてゐる。しかるに今若し汝が動揺して私等の内に隙が生じたとすれば……』

「私は昨夜、野枝子に対して All or Nothing の態度に出たのです。しかし野枝子は何分にも激動して口もろくには聞けません 只だ明日ゆつくり落付て書きますといふばかりです 私は苦しくつて耐りません。とても安眠することなどどうして出来ませう。私は幾度かうながしました。しかし彼女の激動がはげしく稍もするとヒステリックになるので、私には弱い心が起つてとにかく一日丈忍ぶことにしたのです。無論私は今日外に出て働いて居ります間も絶へず苦しみに苦しみました。私は野枝子の返事に対してさまざまの危惧を抱いて急いでかへりました。私は帰ると早速書いたものを要求したのです。けれどあなたからの御手紙の他はなにものをも見ることが出来ませんでした。私は又不安で耐らなくなりました。夕飯をすましてから野枝子には父に宛てた書面を出しに行こうとしました。私はその手紙を求めました。野枝子はそれを拒みました。私は又憤がムラ～～と発してきて彼女の手からその書面を奪取りました(ママ)。野枝子は又昂奮して泣き倒れました。而してヒステリーの状態になつて喘ぎ初めました。私は水を口うつしにしてやり、彼女の心を出来る丈静めやうと務めました。暫時後、落付たので私は今日書きましたものを見せて、静かに又解決を促がしました。そうして私は急(ママ)ぐ今夜にもあなたに御目にかかつて私等の態度を明瞭にしたいと思ひました。

「野枝子の返事は左の如きものです。

「『私は昨日木村さんの処にゐる時から態度を明かにする事には気がついてみました。然し私は私の最後に私が木村さんに書いた手紙に就てはあなたに何にも云ひませんでした。それがあつたので、私は私の明かな返事を木村さんに与へるに就て、是非、あなたの前でなければならぬと思つて何にも云はずにだまつてみました。木村さんに私が書いた最後の手紙には私の方から御目にかかりたいと云ふことも申しました。而して私はかなり、あの木村さんの心持に動かされたのです。それは本当です。さうしてその返事を一気に書いて出した後でまたあの手紙をよみ返して木村さんが本当に落つた気持で書いたのではないと分つた時、私は大変悪い事をしたやうな感じがしました。木村さんの激した心にあれがどんな心持を与へるかと静かに考へた時、私は恐しくなつたのです。いづくか私はその事を木村さんに書いて送らうとしましたけれど書けませんでした。ただ頭一杯になるのはあなたに対して何と云つていいかといふ事ばかりです。私はあなたの御留守の間、机の前にすわつてその事ばかりに毎日泣いてみました。そして恐しい気持で木村さんのその返事を待ちました。その返事が来次第にあなたにそれを見て頃いて私の書いた手紙の内容もはなしておわびしやうと思つたのです。とう～返事が来ないで私は木村さんに別に何の激動も與へなかつた事を安神（ママ）しましたけれども、矢張りあなたになんとはなしていいか困つてしまいました。そのうちに昨日電報が来ましたので、どうしやうかと思ひましたけれどもあなたのおかへりまでにかへつて御話しすればよいと思つたのですけれど、小母さんのうちでねてゐたりしたのでおそくなつてしまつたのです。七時頃木村さんが帰つて来ました。而して私は始めて私の最後の手紙のために木村さんに大変な感ぢがひをされた事を覚りました。木村さんは私のその手紙を見るとすぐに返事を出したのだそうです。それに来てくれと書いて置いたのに、来ないので電報をうつたのだとの事です。その手紙は私の手にはとう～はいらずじまいです。昨夜はいろ～な事を云つて私は迫られました。（僕の態度をただかう簡単に迫つたと取る野枝氏の理解はどうかしてゐる。）けれども私は手紙で私が稍感動したのとまるで反対に相對してゐましても私の心はそうさはぎませんでした。只だ私はそれが皆何にもかも私とあなたとの間の固い結合をこゝろみられるのぢやないかといふやうな氣ばかりいたしました。それで私は木村さんのいふ事をだまつて聞いてみました。而して何に対しても返事はいたしませんでした。只だあなたと私との愛に就てきかれた時、それは眞実で深い愛着があるといふことを明言いたしました。木村さんは両方の愛をはかつてかけたりなんかして（といふのも僕のいつた言葉と違ふ。僕はただこの際両者の何れに加ふる打撃をも考量せず野枝氏が野枝氏自身のために処す事を勧めたのだ。）はいけないと云ひました。無論私はそんな事はしません。ただ私には如何してもあなたと一緒に進んで行きたい、苦しい生活でも続けて行きたい。もしあなたが私を理解して下さらないやうな方だつたり、私の眞の生活を阻むやうな方だつたら、私は木村さんに走るかもしれませんがあなたは私の全ての生活を肯定し、同情して下さるのですもの。私はあなたと生きるのは充分幸福だと思つてゐます。そして私は友達に対するやうな敬虔な心持で木村さんに対してゐます。私は昨日木村さんがあのくらいはげしい感情でぶつかつてきたのに対して共鳴するものがなんにも私になかつたことは本当です。そして私の心はあなたばかりでした。そして歸つて来るまで、別に大してちがつた気持は持つてゐませんでした。けれどもただあなたが非常に私に憎悪の感を抱いて怒つてらつしやると分つた時、私の心は一斉に動き出して、何だか分らなくなつてしまひました。私の木村さんに対する苦しい気持はまつたく自分でいけないのだから仕方はありません。そうして何と云はれて

も、何でもかまひません。ただ私はあなたにどうしていいか分かりません。私は本当にどうしていいか分からないのです。あなたがどうしても私を憎んであつしゃるのなら、私をどうでも思ふ存分にしてください。私は体もなにも入りません。私はあなたからいまはなれて行く位なら、生きてゐない方がよつぽどましです。生きられません。どうにでもして下さい。自分にもなんだか分らなくなりました。木村さんの処へは今夜行つてもかまいませんけれど、私はまだ激してゐますから心がしづかに少しなつてから行きませう。』

「私はこれを読んで直ぐにこう書きました。

「『おまへの態度はよく解つた。併し私はおまへが俺に與へた傷から容易に癒されさうもない。又私の木村氏に対する感情も余程異つたものになつてきた。私は今静かに木村氏に対することは覚束ない。しかし私はなるべく落付て出来る丈、理解しあいたいと思ふ。そうして友人としての関係をつくることは当分私は拒みたいと思ふ。今の私は其処までとても進んではゐない - そうしておまへの自覚はどうか。私は強ひて自分をごまかして又後につまらない結果をもたらしたくない。』

「野枝子は『無論そうなければなりません。それは木村さんも云つてみたことなのです。それが耐へ得られる事ではないといふ事は私にもよく解かります。』（七月一日夜）

「もつと書きたいのですが、今朝あなたの御宅に出かけることになりましたので - 書けません。まだ言ひたりないことが沢山ある様に感じてゐますから - いづれ落付てから書きたいと思ひます。（二日朝）

僕はこの手紙の内容に就いては何等の推測も断定もしまいと思ふ。またし得ないと思ふ。ただ読者自身判断して呉れるのに任せやうと思ふ。

僕がこの手紙を読んでゐるうち、辻氏は便所に立つて行つた。

僕はその時女に対つて、

「ぢやあなたは僕を離れようとするんですね。もう僕を離れてしまへるんですね。」

といつて糺した。

女は微かに肯いた。

そのうち辻氏が上つて来てから、僕等はもう何もいはなかつた。

僕が手紙を読み終つた時、辻氏は、

「これでなんにも後に残さずお互ひに理解し合つてお別れしたいと思ひます。」

と僕にいつた。

僕は答えた。

「僕にはさうはゆかぬだらうと思ひます。僕にはあなた方に対して嫌な感じが残るだらうと思ひます。自然にそれが残るものなら僕はどんどん残します。それにあなたにも僕は自分が理解されてると思ひません。あなたは野枝さんがあなたに隠して出した手紙を一つだけだと思つておゐでになるのでせう。外にもう一つある筈です。（僕は野枝氏の顔を見た。）ねえ文祥堂から出した後の方のはあなたは辻さんにお見せにはなりませんまい。（野枝氏は苦しい色を浮べて肯いた。）」

「そんな手紙があるのか。」

と辻氏はせき込んで同じく女の顔を見詰めた。女は黙つてゐて肯いた。

「あの半紙へ黒（ママ）で書いた手紙 あれはあなたも御覧になつたと思ひますが

でその手紙は出すまでに二日遅れてゐるのです。そしてもう一通あなたの知らない手紙と一緒に僕のところへ来てゐるのです。それが御解りにならないでゐては僕はほんとうに御解りになりはしません。」

「その手紙を拝見させていただきます。」

「今僕のところにありません。弟のところへ置いて来てあります。」

「ぢや弟さんのところへ御一緒に参りませう。弟さんにも御会ひしたいし（妙な事だが辻氏は以前小学校の教師をしてゐて、その時僕の弟に初歩の英語を教えたのだ。それはこの前会つた時辻氏がさういつたので解つたのだ。）御一緒に参らうぢやありませんか。」

「ええ、行きませう。」

僕はさういつて笑つた。

辻氏はその時、

「これで解つた。」

といひながら軽佻に立ち上つた。

「ああ、これで気持がいい。気持がいい。」

僕はその辻氏の態度を冷やかに鑑賞した。辻氏には僕の心理は全然解らなかつたに違ひない。ただ僕が既に全然女を無視してゐる態度のみ解つたに違ひない。僕にはその時の辻氏の気持がよく解つた。そして軽蔑し且つ不快に思つた。

やがて僕等はそこを出て赤坂の弟の家へ行つた。

僕は野枝氏の手紙を全部辻氏に示した。

辻氏はそれを読み終つてから、

「こりやみんな本当で書いたんだな。」

と肯くやうにいつて女を顧みて、それから僕の顔を見た。僕には辻氏がどういふつもりでかういつたのだから今だに洞察し入る事が出来ない。

僕は、

「とにかく解決して置ませう。」

といつて、再び今度は辻氏の前で、女にいつた。

「あなたは僕を離れるのですね。」

女は僅かに反抗するやうに決意を示して、

「ええ、私もっとゆっくり落ちついて後の手紙を書けばよかつたのです・・・・・・それに手紙で想像したのとは御会ひした感じがすっかり違つたのです・・・・・・大変に冷静でした・・・・・・私は今のまんまで幸福だと思ひます.....それにこの上自分が激動したくありませんから・・・・・・」

すると辻氏は、

「もうこれでお互ひに嫌な思ひを後に残したくないと思ひます。」

といつた。

僕は、

「さうは行かないと思ひます。」

といつた。

「必然に残れば残す外ありません。僕はあなた方を憎悪 - いや蔑視します」

辻氏は少しせき込んだ。

「憎悪されても構ひません。しかし蔑視は出来ないと思ひますね。僕はあらゆる場合に蔑視だけはしたくないのです。」

「僕は蔑視するのです。」

「あ、あ、さうでせう。僕もあなたの場合なら屹度蔑視するでせう。蔑視しなければ生きてゆかれませんか。」

僕はもう何もいひたくなかつた。で野枝氏に対つて最後に、

「僕はあなたを蔑視して棄てます。」

といつた。

野枝氏は僕から行つた手紙をそこへ持つて来てみた。僕がこの事を書くからといつて頼んで置いたのである。僕はその手紙を受け取つて野枝氏のと一つにした。

その時辻氏が、

「お前も自分のを頂いて行つたらよからう。」

と野枝氏にいつた。

「いえ、僕のは僕が頂いた手紙ですから御返しは出来ません。野枝さんからはこれは拝借するのです。いけないとおつしゃれば自分の手紙は思ひ出しても書きますが、もしかさうして嘘になるより拝借したいと思ふのです。」

「あ、さうですか。ではもしまたこちらでも入用があつたらそれを拝借するかも知れません。」

「ええ、ええ。」

と僕はいつた。

それから辻氏は野枝氏を下へ残して置いて、僕と二階へ一緒に上つて弟と少し話した。さうして直きにふたりして歸つて行つた。

書くのを忘れた。辻氏は野枝氏が見なかつた手紙の事を弁解しながら、市外でよく届かない事なぞがあるといつた。

僕はふたりが戸口を出るの見送ると、男は女が隠して出した手紙の事を今日までも尚隠してみた事、女はまたその男が僕の手紙を奪つた事に就き、途々互ひに安価なレコンシリエーション（和解）をしながら歸つてゆくさまを想像した。

するうち僕には女に対するヂスイリユウジョン（幻滅）の思ひも、予期の全く外れ終つた失望の感も、一切すべてが湧き上る強い力の自覚のうちに溶け去つた。僕はその快感のうちに思はずひとりして肩をゆすつた。

* * * * *

アフタアエフェクト。

僕にはその夜反動の影がさした。

僕は力が足らなかつた。女を生かし得なかつた。と思ふと一齊に僕には自身にこの事の僕の一切が虚偽と見えた。虚偽！ 虚偽！ 女性を信じようとした虚偽！ 自身がかゝる慈愛に生きようとした虚偽！ 一切のすべての虚偽！

僕には再び最近の過去の自分が蘇へるかと思はれた。その頹廢と淫逸な業慾の世界のうちに生きた自分が急速に蘇へるかと思はれた。眞に自身の堀り生かすべきものがただその境ひにのみあるのかと思はれた。

だが僕にその反動は直ぐ経過した。

僕の心はただ隙間なく強烈な猛烈な制作の慾が充たした。僕の心は澄み切つた。僕には更に力の強い希望と光明が湧き上つた・・・・・・・・僕はどんどん成長する・・・・・・・・女性もまた成長する・・・・・・・・僕は更にまた一層女性を愛する。愛する。愛する。